



大妻女子大学 地域連携推進センター  
令和 4 年度年報

第 10 号

令和 5 年 7 月

大妻女子大学 地域連携推進センター

---

---

## 目次

---

---

地域連携推進センターの概要	1
地域連携推進センター設置の背景	1
運営基本方針	1
機能と役割	1
組織構成	2
委員会構成	2
構成員	3
令和4年度 地域連携プロジェクト報告	4
地域連携プロジェクト概要	4
地域連携プロジェクト採択一覧	4
和装振興プロジェクト～伝えよう！和服の魅力～	6
保育の魅力を保護者に伝えるための、少子化地域の行政との協働プロジェクト	8
北海道美瑛町の公立学校の児童・生徒への教育支援	10
<b>CHIYODA Creative ART Lab for Children</b> 千代田クリエイティブ・アートラボ	12
科学技術館との地域連携活動プロジェクト「夏休み数楽教室、自由研究お助け隊」	14
三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化活動	
およびその活動を世界に広げよう	16
多摩ニュータウン南大沢 40 年 CI プロジェクトと	
高齢者と子どもたちのエンパワーメント支援	18
能登の里海を守る：海育実践と地域活性化プロジェクト	20
「高齢者聞き書き」で創る交流事業プロジェクト	22
医療的ケア児童のファミリーフォト展	24
気仙沼市における「ご当地グルメづくり」による復興支援活動	26
学ぼうみんなのさいこうの笑顔のために	28
からきだ匠(たくみ)カフェ～地域がつながる場所～	30
障害者雇用企業との連携による多摩祭 T ボール大会の開催	32
地域の多世代がつながるみそ作りプロジェクト	34
食と環境の調和に向けた食育の推進～産官学民連携による実現を目指して～	36
地域に根ざす図書館認知症カフェプロジェクト	38
令和4年度 地域貢献プロジェクト報告	40
地域貢献プロジェクト概要	40
地域貢献プロジェクト採択一覧	40
子育て世帯を食で支えるプロジェクト	41
小学校の読書活動推進への貢献を図る学生ブックソムリエの展開	43
健康への食意識向上の情報とがんを支える	
期間限定「がんと健康的な食事・食べ方通信」の定期的配布と取り組み	45
大妻さくらフェスティバル 2023	47

業務報告 .....	50
事業内容 .....	50
令和4年度 決算報告 .....	53
資料 .....	54
大妻女子大学地域連携推進センター規程 .....	54
大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会規程 .....	56
大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会規程 .....	58

# 地域連携推進センターの概要

## 地域連携推進センター設置の背景

平成 17 年 1 月の中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」において、21 世紀における大学の使命は、教育と研究だけでなく、社会貢献が第三の使命とされました。大学の自己点検・評価にも含まれているように、大学が果たすべき役割の中で、学術研究や人材育成に加えて「地域連携」が重要性を増してきています。

本学でも、「大妻学院のミッションと経営指針（平成 20 年 9 月）」において「教育機関としての社会的責任を認識し地域社会との連携に努める」ことが掲げられ、学院の社会的責任として「今後地域貢献を展開させていく組織として教職員協働による地域連帯センター（仮称）による組織的支援が欠かせない」と述べられています。

平成 21 年度に開催された「地域社会との連帯に関する懇話会」では、様々な角度から本学の地域連携の在り方を検討した結果、今後一層、在学生、教員、卒業生と地域社会との連携を活性化して広報につなげると共に、それらを促進する機能として「大学の社会的責任（USR）全般に関わる情報の整理と一元化、連絡・調整、広報の一部を担うもの」として地域連携に関わる包括的センターが必要であるとまとめています。

また、これら社会貢献や社会的責任という視点に加え、学生が地域の諸活動に参加することは、主体性や積極性を養い、実体験を通して考える機会となり、教育的観点からも地域連携の推進が重要であることは言うまでもありません。

これらを背景として、平成 25 年 4 月 1 日に地域連携推進センターが新たに設置されました。

## 運営基本方針

1. 大学の社会的責任として、地域連携を積極的に推進することを基本方針とする。
2. 地域連携でいうところの「地域」は、近隣地域に限らず、地理的範囲を超えた保護者、卒業生、関係機関、企業、行政など、大妻女子大学を取り巻くステークホルダー全体を含むものとする。
3. 地域連携の内容は、大妻女子大学の教育理念である「女性の自立のための女子一貫教育」の考えを踏まえ、学生が様々な地域と関わる中で主体性や自立心を身に付けることができるよう、その活動に在学生が直接関わったり、その成果を在学生の教育に反映できるものについて、重点的に取り組む。

## 機能と役割

### 1. 広報機能

地域連携のテーマの下、学内における既存の活動や事業を WEB サイト等でタイムリーに発信するとともに、年次報告の形で、本学の地域連携の実績を外部に公表する。

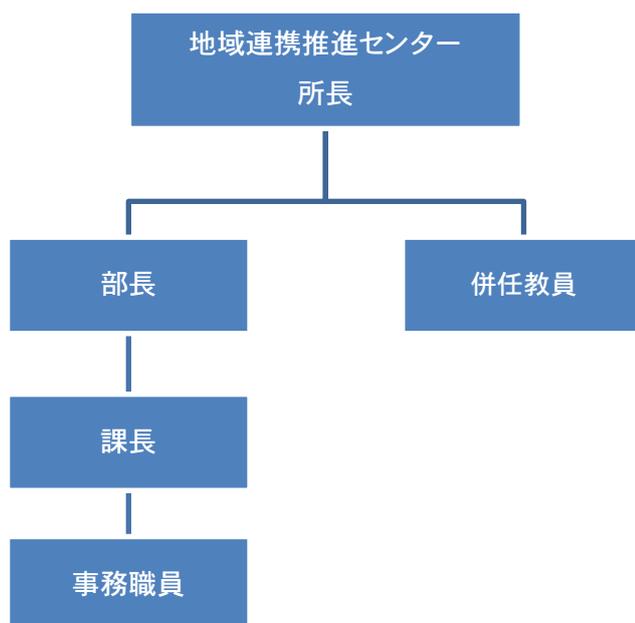
### 2. マッチング機能

社会のニーズ（市民、企業、行政等）と大学の持つ機能のマッチングを支援し、学外からの「地域連携」に関連した相談や紹介要請に応え、学内の資源につなげる。

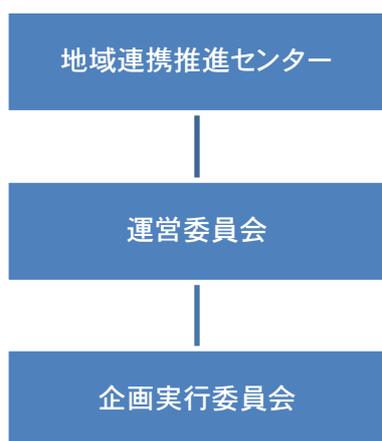
### 3. 企画・活動促進機能

社会貢献や社会的責任の実行のみでなく、教育機能を併せ持つ地域連携活動を企画し、活動を促進するため、「地域連携プロジェクト事業」(4ページ参照)を、また、より地域に根ざした活動を促進するため「地域貢献プロジェクト事業」(40ページ参照)を地域連携推進センターの下に創設し、その運営を行う。

#### 組織構成



#### 委員会構成



## 構成員

### 令和4年度 地域連携推進センター名簿

構成員	氏名	所属等
センター所長(学長が任命)	小川 浩	副学長
センター事務部部长	小川 雅之	事務局
センター事務部課長	栗田 陽介	事務局
センター事務職員	中本 猛	事務局
	宮澤 律江	事務局
併任教員(学長委嘱)	岩瀬 靖彦	家政学部
	千田 誠二	文学部
	炭谷 晃男	社会情報学部
	堀 洋元	人間関係学部
	佐藤 実	比較文化学部
	堀口 美恵子	短期大学部

### 令和4年度 地域連携推進センター運営委員会名簿

構成員	氏名	所属等
センター所長	小川 浩	副学長
センター事務部部长	小川 雅之	事務局
センター事務部課長	栗田 陽介	事務局
家政学部長	市川 博	家政学部
文学部長	増野 弘幸	文学部
社会情報学部長	藤村 考	社会情報学部
人間関係学部長	福島 哲夫	人間関係学部
比較文化学部長	佐藤 円	比較文化学部
短期大学部長	下坂 智恵	短期大学部
人間文化研究科長	田中 直子	人間文化研究科
事務局長	杉田 学	事務局
その他学長の委嘱する者	無し	

### 令和4年度 地域連携推進センター企画実行委員会名簿

構成員	氏名	所属等
センター所長	小川 浩	副学長
センター事務部部长	小川 雅之	事務局
センター事務部課長	栗田 陽介	事務局
センター事務職員から1名	中本 猛	事務局
併任教員	岩瀬 靖彦	家政学部
	千田 誠二	文学部
	炭谷 晃男	社会情報学部
	堀 洋元	人間関係学部
	佐藤 実	比較文化学部
	堀口 美恵子	短期大学部
各学部・研究科から選ばれた専任教員	岩瀬 靖彦	家政学部
	千田 誠二	文学部
	炭谷 晃男	社会情報学部
	井上 修一	人間関係学部
	佐藤 実	比較文化学部
	堀口 美恵子	短期大学部
	田中 優	人間文化研究科
学長の委嘱する専任教員	無し	
その他事務局長の委嘱する者	無し	

# 令和4年度 地域連携プロジェクト報告

## 地域連携プロジェクト概要

### 1. 趣旨

教職員のグループ又は教職員と学生のグループによる、学生の主体性や自立心が身に付く地域連携活動の一層の推進・発展を図ることを目的に、その活動経費を補助する。

### 2. 対象テーマ

地域社会との連携を活性化するとともに、学生の教育に反映できる活動。分野は不問。

### 3. 応募資格

個人ではなく、以下のいずれかに該当するグループであることが必要。

- ・本学の教職員で構成されるグループ
- ・本学の教職員と学生(大学院生・短大生を含む)で構成されるグループ

※学生のみグループは応募不可。

※申請代表者は専任教職員に限る。

※申請代表者としての申請は1件に限る。

### 4. プロジェクト支援期間

令和4年5月12日(木)～令和5年3月31日(金)

### 5. 支援額及び採択件数

支援額：1件につき30万円を上限

採択数：10件程度（うち、6件程度を千代田枠または多摩枠とする）

## 地域連携プロジェクト採択一覧

プロジェクト名	代表者
和装振興プロジェクト～伝えよう！和服の魅力～	阿部 栄子
保育の魅力を保護者に伝えるための、少子化地域の行政との協働プロジェクト	石井 章仁
北海道美瑛町の公立学校の児童・生徒への教育支援	石井 雅幸
CHIYODA Creative ART Lab for Children 千代田クリエイティブ・アートラボ	金田 卓也
科学技術館との地域連携活動プロジェクト「夏休み数楽教室、自由研究お助け隊」	木村 かおる
三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化活動およびその活動を世界に広げよう	厚東 芳樹
多摩ニュータウン南大沢40年CIプロジェクトと高齢者と子どもたちのエンパワメント支援	炭谷 晃男
能登の里海を守る：海育実践と地域活性化プロジェクト	細谷 夏実
「高齢者聞き書き」で創る交流事業プロジェクト	藏野 ともみ
医療的ケア児童のファミリーフォト展	丹野 眞紀子
気仙沼市における「ご当地グルメづくり」による復興支援活動	千川 剛史

学ぼうみんなのさいこうの笑顔のために	堀 洋元
からきだ匠(たくみ)カフェ～地域がつながる場所～	八城 薫
障害者雇用企業との連携による多摩祭 T ボール大会の開催	山本 真知子
香辛料・植物性素材を教材とした食育推進プロジェクト	田口 裕基
地域の多世代がつながるみそ作りプロジェクト	富永 暁子
食と環境の調和に向けた食育の推進～産官学民連携による実現を目指して～	堀口 美恵子
地域に根ざす図書館認知症カフェプロジェクト	深水 浩司

## 和装振興プロジェクト～伝えよう！和服の魅力～

阿部 栄子 教授  
(家政学部 被服学科)

### 【プロジェクトの目的】

きものは日本固有の衣装であり、その中には日本人ならではの「文化」が凝縮されています。また、きものが完成するまでの多くの各過程には日本人の卓越した職人の心と技が生かされており、きものは世界のどの民族衣装にも劣ることのない誇るべき染織技術によって作り出されています。本和装振興プロジェクトの開催を通して、世代を超えた人々が広く和服（きもの）に興味をもち、日本文化の理解を深め、着実に後世へと「きもの文化」を伝承していくことを目的として実施しました。

### 【プロジェクトの概要と実施効果】

これまでに、本学被服学科における卒業研究（和服製作）はいくつもの団体・地域から注目され、数年前から日本橋（東京）における“きものサローネ in 日本橋”において、学生きもの優秀作品として複数点が毎回選定され、公開展示して参りました（例えば、日本橋、東京・COREDO室町2・三井ホール）。令和4年度も和装きもの3点（何れも婚礼衣装；打掛）が選定されましたので、これらの作品展示実施に向けた計画と作品の公開展示、このきものを中心とした着装コーディネートの本プロジェクトの学生が担当するもので、展示期間中の展示解説も本プロジェクトメンバーが担当しました（一般展示公開：令和4年11月5・6日、会場：東京国際フォーラム Eホール[東京都千代田区丸の内3-5-1]）。

本展示の開催は、在学生、卒業生、地域住民を対象として実施することに加えて、更に、都内および近郊の染織工房訪問や職人の技について、見学会や熟練された技術者から体験談などが聞ける機会を確保したいと思い、近隣の家政系大学にも声かけして計画したプロジェクトです。参加した学生全員が、これらの実施を通して、日本文化への理解が更に深まったことは大変に意義深く、貴重な経験となりました。このような活動を通して「きもの（和服）」を多くの若い人たちが気軽に楽しめる衣服として身近に捉えてほしいこと、そして製作・着装を含めた実技、さらには、人々の通過儀礼をも解説指導できる本格的なプロジェクトチームとして成長したいと考えています。学生自ら、和服の製作、目的別コーディネート・着装を学ぶ中で自信をもって、和服の魅力を人に伝えることによって、学びの自信にも大いに繋がったものと感じています。



学生優秀作品展として選定された本学作品（婚礼衣装3点）



展示の様子 (於 東京国際フォーラム Eホール)



展示当日における閲覧の様子 (於 東京国際フォーラム Eホール)



会場受付も学生が担当



実施ポスター

# 保育の魅力を保護者に伝えるための、 少子化地域の行政との協働プロジェクト

石井 章仁 准教授  
(家政学部 児童学科)

## 1. プロジェクトの目的・方法

1990年代より顕著になった少子化に加え、コロナ禍を境にさらなる子どもの数の減少が我が国の課題となっている。本プロジェクトは、子どもの数が減少する地域（人口減少地域）において、学生が取材や撮影した素材を冊子にして、保育や子育て支援の魅力や意義などを地域の保護者に伝えることを目的としている。あわせて、学生にとっては、人口減少地域の現状と園の保育の魅力や特色を理解し、保護者や地域社会に向けていかにわかりやすく伝えるスキルが求められている。

なお、協働する保育現場は千葉県睦沢町の町立睦沢こども園であるが、町にあるこども園、小学校、中学校において継続した保育・教育プログラムを展開している。

## 2. プロジェクトの内容・経過

今回参加した学生（児童学科3年6名）は、保育の現状や町の特色などを事前に学習し、こども園に3回取材に訪問した。訪問時には、保育を観察し、写真の撮影やインタビューなどを行った。すべての取材の終了後、写真の選定や紙面構成を行い、こども園に確認を取りながら校正を進めた。

表 1 取材の内容

- |  |
|--|
| <p>① 2022年8月25日（第1回取材）；学生が各クラスに入り、午前中の保育を観察し（夏の遊び）、写真を撮影した。また、午後は園内で行われる研修に参加し、保育者の学びについて取材した。</p> <p>② 2022年10月26日（第2回取材）；事前に取材ポイントを絞り、学生が各クラスに入り、午前中の保育を観察し（秋の遊び）、写真を撮影し、インタビューも行った。</p> <p>③ 2022年12月21日（第3回取材）；事前に取材ポイントを絞り、学生が各クラスに入り、午前中の保育を観察し（冬の遊び）、写真を撮影し、インタビューも行った。特に、子育て支援や地域との連携などについて取材を行った。</p> |
|--|

## 3. 取材のまとめと冊子「むつざわっ子のはじめの一步」の作成



図1 表紙・裏表紙



図2 目次・教育保育目標等



図3 こども園の遊びと四季



図4 遊びの中で育つきずなを大切にしています



図5 人間力が育つ



図6 社会力が育つ



図7 食育・地域や関係機関との関わり



図8 子育て支援・研修・年間行事・コラム

#### 4. まとめ

本プロジェクトでは、学生が主体となって、人口減少地域の保育の理解とその特色をいかに保護者に伝えられるかがポイントであった。最終的に現場の意見を聞きながら、1つの成果物を作成したことに意義がある。加えて、冊子およびPDFデータをこども園や教育委員会等から、地域の保護者にむけて発信できるようになればと考えている。まだ、配布したてであり、その効果は分からないが、引き続き検証し、今後の活動に役立てたい。

## 北海道美瑛町の公立学校の児童・生徒への教育支援

石井 雅幸 教授  
(家政学部 児童学科)

概要：2022年度包括連携協定を結んだ北海道美瑛町の公立学校の児童・生徒に対して、本学学生と教員による学校支援の取り組みを模索的に行い、今後、どの範囲まで実施可能であるのかを探る試みです。

具体的には、本学の長期休業期間中に、本学の児童学科の学生が美瑛町内の公立学校の学校教育活動に入り、学習支援や学校生活指導上の支援を要する児童・生徒への支援を美瑛町教育委員会並びに本学の児童学科の教員の指導のもとで行っていくものです。こうした取り組みは、これまでに美瑛町では近隣の大学とも行う機会がありませんでした。そこで、今回の本学との包括連携協定の締結をきっかけにして、これまでの経緯から、本学と美瑛町の連携が取り組みやすいことを考慮し、学生が行う支援の可能性を探るとともに、本学の知名度を美瑛町にも高め、将来的には美瑛・富良野・旭川周辺の若者の本学への進学を促すきっかけを模索していきたいとも考えています。また、本学の学生が地域創生の必要性を学ぶきっかけをつくらせたいとも考えています。



図1 農業と福祉の連携事業として行われた収穫作業に参加者と一緒に学生が行った。かぼちゃの収穫作業

### 1 取り組み内容

児童教育専攻の2年と3年の学生6名が、美瑛町に出かけ、下記のような取り組みを行ってきました。今年度は、あくまでも今後に向けた試行的な取り組みとして行ったものです。

表 2. 8月末～9月の取り組みの活動概要

8月30日(火)午前中に美瑛町入り 午後 オリエンテーション
8月31日(水)午前 美瑛中での学級に入っの取り組み 給食 午後 座学・講話(美瑛町の教育) 放課後、美瑛町学校の文化祭準備のお手伝い
9月1日(木)保幼小中学校連携(美瑛町子育てファイル～すとりーむ～より)を知る一日
9月2日(金)体験学習：農業・福祉連携事業への参加、星の観察(星のソムリエからの講義と星の観察)
9月3日(土)午前 小学生対象の土曜学習 昼食・午後体験学習(美瑛の町をめぐり、美瑛の魅力を知る)
9月4日(日)美瑛町の町を知る取り組み藍染め体験これまでの取り組み成果発表
9月5日(月)午前 美馬牛中での体験 給食 午後 帰京

本取り組みを通して、学生たちは、最終日前日の成果報告会で図2のような成果を発表しました。今回の取り組みで学生が学んだことは、図2のスライドに示したことです。



図 2 成果発表の様子と成果スライド

**・今回のプロジェクトで学んだこと**

**・美瑛の教育**  
「予防教育」  
→早期に、将来起こりうる困難さを、個々のニーズに応じて、支援・指導を行うこと  
「すとりーむ」  
→すべての子どもたちが育ち、就学、就労するまでの、成長を一貫して活用できるように、子どもと保護者に配布している。

**・そだち、すだち、ことばの教室**  
「自立活動」  
→楽しく遊ぶ中で自分がどうしたいかを表したり(遊戯療法)、作業やコミュニケーション、コミュニケーションをしていくことで、自分で考えて行動することを目標とした活動(自己理解、自己決定、自己選択など)

**・子ども支援センター**  
→新生児～就学前まで、定期的に訪問や健診を行う。また、その中でも、子育てに不安や問題を抱えるお母さんのための教室なども開かれている。

**・「美瑛中」での取り組み**  
1. ノーチャイム  
→自分で時計を見て行動  
2. 中間、期末テストの廃止  
→定期的に能力テストを行うことで、持続した勉強に繋がる  
3. 全員担任制  
→いろんな先生との交流、少しの事でも話せる

↓

発達早期発見や支援の情報交換に繋がる。

この取り組みの何よりの成果は、美瑛町教育委員会の方々や、今回学生が訪問した美瑛町内の中学校の校長先生をはじめ、多くの先生方が学生の取り組みに教育的な価値を見いだしてくれたことです。そのおかげで、令和5年度は9月と2月に8日間の6人の学生を受け入れた取り組みを、美瑛町教育委員会が企画し、話を進めてくれていることです。

## 2 本事業の発展として

今回の取り組みが、新たな事業を生み出しています。その一つが、図3の本学学園祭での美瑛町出展と、その中での本学と美瑛町のつながりを説明したコーナーを設けたことです。その中で、本事業の夏季休業中の美瑛町での取り組みに参加した学生が、自らの学びで得たことを、来場者に説明しました。また、2023年3月に行われたさくらフェスティバルにも美瑛町が出店しました。その際にも、本事業に参加した学生がお手伝いをしてくれました。



図 3 学園祭にて美瑛の教育を語る学生

さらに、先述しましたような、次年度の計画が進んでいます。令和5年度の学生の美瑛町内の公立学校への受け入れだけでなく、美瑛町の子どもたちが、東京を訪問し、東京の子どもたちとともに、北の丸公園や東御苑での自然観察、東京史跡めぐりを行うことを予定しています。

以上の取り組みの中で、美瑛町との関係が深まるだけでなく、学生の地方創生の意識や少人数体制の中での徹底した個別支援の教育の在り方への意識が高まっています。最後に、美瑛町の取り組みにかかわった令和4年度の卒業生が美瑛町内の公立小学校教員に赴任いたしましたことを付記いたします。

プロジェクト構成員：児童学科：樺山敏郎、厚東芳樹、蛇岩沙紀

## CHIYODA Creative ART Lab for Children

### 千代田クリエイティブ・アートラボ

金田 卓也 教授  
(家政学部 児童学科)

#### はじめに

私の専門分野は芸術教育ですが、これまで、〈もの作り〉の活動を通して子どもたちの創造性を豊かにする可能性を探ってきました。大学の授業では、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生たちに造形活動の教育的意義についての理解を伝えるとともに、学生たちも自分自身の作品を制作しながら実際に子どもたちとどう関わっていくべきか学んでいます。

学生たちは、卒業後、保育園、幼稚園、小学校で子どもたちの造形活動と関わるわけですが、教育の場というものは保育園、幼稚園、小学校に限られるわけではありません。子どもたちはさまざまな大人と関わりながら、いろいろなことを学び成長していきます。ひと昔前であれば、子どもたちは近所のお姉さんの手編みのやり方を見よう見まねで覚えたり、大工さんの仕事場を覗き込んでノコギリの使い方を学んだりしていました。そうした子どもたちの〈もの作り〉の環境を大学でできればと考えていたところ、今回、地域連携プロジェクトのひとつとして実現することができました。何かを教えるという教室ではなく、アトリエや工房や実験室のイメージに近く、千代田クリエイティブ・アートラボと名付けることにしました。

#### 夢やアイデアを形にする

千代田クリエイティブ・アートラボでは、地域の子どもたちに大学に来てもらい、保育や教育を専攻する学生たちとともに「こんなものが作りたい」「こんなものがあつたらいいな」という子どもたちひとりのひとりの夢やアイデアを具体的な形にするための素材と場所を提供しています。千代田キャンパスの造形表現室で月 1~2 回、木曜の放課後 16:00 から地域の子どもたちが数名ずつ集まってきました。普段、家庭や学校では手に入れることの難しいさまざまな素材と出会えることと、安全を配慮したスタッフと一緒にのこぎりやグルーガンなどの道具も使用することができるということも参加した子どもたちにとっての大きな魅力になっています。

#### 子どもたちの自由な発想

『子どもは誰でもアーティスト。大人になってもアーティストでいられるかどうかの問題だ』と言ったのはスペインの画家ピカソですが、千代田クリエイティブ・アートラボでは、子どもたちの豊かなイマジネーションと感性を大切にしながら活動を続けています。参加している子どもたちの自由な発想にはいつも驚かされています。

大人である私たちこのラボの運営スタッフも子どもたちの自由な創造力に負けないようにいつも心がけています。最近の子どもたちは、家庭と学校以外で大人と直接関わる機会はあまり多くないといえます。その意味では、このアートラボは参加する子どもたちにとっては、スタッフとして関わっている教員ばかりではなく、大人である学生たちと直接話をしたりする機会となっています。

一方、卒業後は保育士や教員となって子どもたちと関わる職業を目指す学生たちにとっても、実習とは別に子どもたちと交流できる貴重な機会となっています。参加した子どもたちは作りたいものの

ことだけではなく、最近あった出来事などいろいろなことを話してくれます。

### さまざまな大人と関わる—地域の教育力—

このアートラボを子どもたちにとって真剣に話を聞いてくれる大人のいる場所にしたいと考えています。なぜなら、地域の持つ教育力というものは、学校だけではなく、子どもたちがさまざまな大人と出会えるところにあると考えているからです。子どもたちのアイデアを形にする、学校でも習い事でもない、ゆったりとした時間の流れるそんな場所にしたいという目的も十分に達成できたように思います。

このアートラボに毎回のように参加している小学5年生の男の子が、学校の図工の時間も楽しいけれど、図工は授業なのでやることが決まっているのと違って、ここではなんでも好きなものを作ることができると話していましたが、子どもたちの自由な発想や考えを尊重しているこのアートラボの趣旨をよく理解しているといえます。

送り迎えに来る保護者の方からも、いつも参加するのを楽しみにしていて、わが子が普段なかなかできない貴重な体験を大学ですることができているというフィードバックをもらっています。木曜の放課後とは別に、アートラボの拡大版として、土曜日に千代田区以外からの子どもたちも参加できる機会も設けました。夏には、ウクライナから来ている子どもたちも参加して大きな絵を描きました。



千代田クリエイティブ・アートラボの様子とさまざまな作品

# 科学技術館との地域連携活動プロジェクト

## 「夏休み数楽教室、自由研究お助け隊」

木村 かおる 常勤特任准教授  
(家政学部 児童学科)

令和3年度より引き続き「科学技術館との地域連携活動プロジェクト」が採択され、気軽に地域の子どもたちが参加できる、科学館や大学のリソースを用いた楽しい専門性のあるプログラムを提供することを目的に実施いたしました。今回は、「算数・数学」の魅力を伝える「数楽教室」を実施し、夏休みの自由研究として考察できるように、教材開発者と数学者に直接指導していただく機会を設けました。

### 1 本プロジェクトの企画と目的

学校教育においては、理数教育の充実が求められています。理科教育では積極的に地域の博物館等を利用することが推奨され、博物館等でも実験や観察などの体験活動プログラムを用意していますが、数学用のプログラムはほとんどありません。このように、数学教育は理科教育に比べ、体験活動が可能なコンテンツが十分であるとは言えません。そこで、本プロジェクトでは、博学連携の推進として科学技術館で実施されてきた「数楽教室」のプログラムを活用し、夏休みの自由研究に使える教室を企画しました。このプログラムは、学校では体験できない楽しい数学教室を地域の子どもたちに紹介し、数学への興味関心を高めることを目的としました。また、この活動は、博学連携や大学の人材等リソースを用いた大学開放にも貢献できると考えています。

### 2 立体パズル『キューブ 26 ミニ』について

立体パズル『キューブ 26 ミニ』は、アマチュア数学家の小梁修氏が正多面体を学ぶために、自ら開発した教材です。4種類の立体模型を全部で26個つくり、最後に立方体のケースに収める立体パズルです。26個のパーツでできる立方体の組み合わせは何種類になるのか？立方体の断面図はどうなるかを確かめることができます。さらに、表面積と体積について考察したり、正多面体同士の関係を視覚的に捉えることができるなど、大学数学レベルの内容を、数式を使わず感覚的に理解できる教材となっています。

また、なぜ紙の教材なのか、26個のパーツを自分で作るのかは、作業を進めていくう



図1：キューブ 26 ミニ



図2：26個のパーツ

ちに、だんだんわかるようになっていきます。手を動かすこと、作業の丁寧さが求められることや手順を考えて進めることなど、ものづくりや技術・技能の要素もたっぷり含まれています。さらに、

なぜこの大きさなのか、色使いなど工業デザインにもつながっています。教材の中に数学、デザイン、ものづくりとさまざまな要素が隠されている立体パズル『キューブ26ミニ』は、さらに自分で学びを広げ深めていくための夏休みの自由研究には、ぴったりの教材といえます。

### 3 地域連携活動プログラム「夏休み数楽教室、自由研究お助け隊」の実施

この活動は地域連携プログラムとして、千代田区の小中学校および科学技術館に呼びかけ参加者を募りました。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、募集人数を各回 20 名としました。また、当日の参加状況を考慮して、保護者の方にも教室に参加していただきました。

実施日：2022 年 8 月 12 日（金）・13 日（土）

実施時間：10：00～12：00、14：00～16：00

実施場所：大妻女子大学千代田キャンパス F642 教室

参加人数（子ども）：8/12 AM 16 名・PM7 名、

8/13 AM 19 名・PM8 名

※台風接近のため当日欠席者あり



図 3：教室内の様子

#### 実施内容

プログラムは 120 分で企画し、最初の 60 分をキューブ 26 の組立に当てました。26 個のパーツを丁寧に



図 4：4 種類のパーツの関係を調べよう



図 5：立方体の断面

に折りながら、それぞれのかたちの違いや共通性などを見つけ出していきました。休憩後、各パーツの関係性を見出し、体積の関係も考察していきました。次に 26 個のパーツを立方体のケースに挿入し、入れ方が 3 種類になること、灰色のパーツに注目して、透明シートを使って確かめました。灰色のパーツの組み合わせでは、正八面体が立方体に内接していることなど、数式を使わないでも証明できることを体験しました。さらに立方体の断面図が正八角形になること、この状態のものを 8 つ集めると切頂八面体になるなど、参加者が協力して正多面体の性質について学ぶことができました。

また、日本数学協会の宮永望氏による、オリンピック・パラリンピックのエンブレムについて、基本となったデザインを紹介していただき、デザインシートを使って自分だけのエンブレム作りにも挑戦しました。

### 4 まとめ

数学は「紙と鉛筆で行うもの」という思い込みを取り払うことができたプログラムであったと思います。保護者の方も一緒に参加していただくことで、大人も苦手意識を持っていた立体に関して、楽しく学び直しができたようです。教室終了後は親子で多くの質問を受けました。

正多面体は自然の美しさを表しており、その秘密を解明するのが楽しい、そのために自分で教材を作ることが必要だったという講師の先生のお話が印象に残りました。

# 三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化活動

## およびその活動を世界に広げよう

厚東 芳樹 准教授  
(家政学部 児童学科)

### 1 はじめに

本取り組みは、2007年から、三番町町内会、九段小学校、(株)プランナーワールド、大妻学院が協定を結んで取り組んでいる三番町フラワーロードの会の活動です。本取り組みは、番町学園通りの九段小学校から大妻学院交差点までの街路樹の升の中に夏前と冬前に花を植え、管理を行うことを通して、三番町の街をみんなで美しくしていく取り組みとしてはじまりました。その後、児童学科児童教育専攻1・2年学生が主に履修する「児童学基礎体験演習」の一つの取り組みとしても位置づき、現在に至っています。

今年度は、本取り組みを維持・管理していくための仕組み作りに加えて、本活動の国際化を推進していきたいと考え挑戦しました。具体的には、一昨年度より児童教育専攻の学生達がオンラインで関係を構築してきたルワンダやタイの孤児院の代表者や地域住民を対象に、本活動で学んだ「地域の美化活動」のやり方を指導し実践してもらうことも推進してみました。

### 2 令和4年度の活動内容

令和4年度は、すべて対面にて実施可能であったことから、昨年度は中止となった千代田区立九段小学校と九段幼稚園の子どもたちと合同での春・秋花植活動ができました。また、地域の皆様と学生たちで協力して植えた花の管理を継続して実施し、街の美化に努めてきました。その結果、多くの地域の皆様より「街を綺麗にしてくれてありがとう」「いつも頑張ってくれて感謝してます」などといった声かけを頂くことができています。また、今年度は地域美化活動を世界(ルワンダ)に広げる運動として、ルワンダのKISEKIとも連携し、オンライン zoom で活動方法などを学生達が英語で伝え、子どもたちが集まるスラムの一角に花を植えることもできました。以下、活動内容を紹介します。

#### 【「フラワーロード活動」の主な取り組み内容】

- 5月18日(水) 18時00分から 千代田区立九段小学校ランチルームにてフラワーロードの会打ち合わせ(春・夏の部)を実施
- 6月23日(木) 8時50分から 12時10分 フラワーロードの会「花植え活動」
- 10月18日(火) 18時00分から 千代田区立九段小学校ランチルームにてフラワーロードの会打ち合わせ(秋・冬の部)
- 11月24日(木) 8時50分から 12時10分 フラワーロードの会「花植え活動」

#### 【「地域の美化活動を世界に広げよう」の主な取り組み内容】

- 6月30日(木) 16時00分から KISEKIのスタッフたちとルワンダフラワーロードの会 in ルワンダ打ち合わせ
- 7月7日(木) KISEKIのスタッフへ日本や本学の紹介プレゼン
- 7月8日(金) KISEKIのスタッフおよびルワンダのスラム街に住む地域住民に「地域の美化活動」

の紹介プレゼン

- 11月25日(金) KISEKIの主にスタッフに「大妻女子大学」と「地域の美化活動」を紹介し、「地域の美化活動」のやり方を指導
- 12月2日(金)「KISEKI」のスタッフおよびルワンダのスラム街に住む地域住民に「地域の美化活動」のやり方を指導および実施



図1 フラワーロード会での花を植えた活動時の様子



図2 地域の美化活動を世界に広げようの会での花を植えた活動の様子

### 3 最後に

近年、学校教育現場では子供の言葉の発達の遅れによる学級崩壊が話題となっています。ここには、隣・近所の地域で暮らす人や大人とのコミュニケーションの機会の喪失が大きく関わっていると言われています。また、多くの地域で「子供の荒れ」が激しくなりつつあると言われて、1960年代に話題となった教室の危機問題に戻りつつあると言われています。こうした時代だからこそ、地域の中で人と人が結びつく活動、自分達の地域を自分達で綺麗にして守る活動の重要性や教育的価値はますます高くなるものと考えます。今後も、フラワーロードの会を中心に活動を継続していきたいと思っています。

協力者：石井 雅幸・澤井 陽介・林 明子・酒寄 翠、児童学科児童教育専攻1年と2年全学生

三番町町内会・千代田区立九段小学校・千代田区立九段幼稚園・(株)プランナーワールド・あい・ぼーと麹町  
大妻中学高等学校・千代田区役所環境まちづくり部道路公園課・千代田区社会福祉協議会  
KISEK (ルワンダ)・虹の学校 (タイ)

# 多摩ニュータウン南大沢 40 年 CI プロジェクトと

## 高齢者と子どもたちのエンパワーメント支援

炭谷 晃男 教授

(社会情報学部 社会情報学科 情報デザイン専攻)

### 1 経緯

2023 年は多摩ニュータウンの西部地域の拠点となる南大沢がまちづくり 40 年を迎えます。多摩ニュータウンも成熟度が増し、「本当に住みやすい街大賞 2021 シニアランキング」(ARUHI 調べ) で南大沢が第 2 位に選ばれた。確かに駅前の整備された車歩分離歩道、都立大学、スマートシティ構想など、南大沢ならではの資産を活かし、地域の情報の一元化、まちの中心づくりなど、市民と行政が協働で進めるまちづくりが求められている。

そこで、まちびらき 40 年を経過した八王子市南大沢地区の再生プロジェクトに協力しながら、住民の活動を支援するプロジェクトに取り組んだ。さらに、子どもプロジェクトとしての寺子屋活動は月に 1 回程度、八王子市内の小学校施設を借用して小学生のためのサタデースクールを実施するもので継続的に実施した。高齢者プロジェクトとしての高齢者サロン活動にも継続的に取り組んだ。

### 2 プロジェクト

#### a. 南大沢川柳プロジェクト

八王子市南大沢は 2023 年にまちづくり 40 周年を迎える。南大沢は多摩ニュータウンにおける西部地区の中心的地区となっている。そこで当該地区で活動している市民団体である「南大沢コミュニティネットワーク」の団体との協働事業として、市民に対して南大沢に関わる川柳を公募した。

なぜ川柳なのかと言えば、それぞれのまちに対する思いを言語活動によって表現しそれを収集することにした。川柳は、短歌とは違い五・七・五の短い 17 文字で表現され、同じ語数の俳句とは違い季語などはいれなくとも良く、誰にでもつくりやすい特徴がある。それぞれの南大沢に対する思いを 17 文字で表現してもらった。結果として 432 句の川柳が集まった。

募集期間 7 月 13 日～9 月 15 日

作品展示 10 月 8 日～23 日 八王子市生涯学習センター南大沢分館

10 月 26 日～11 月 11 日 八王子市社会福祉協議会 はちまるサポート由木

2 月 1 日～2 月 15 日 イトーヨーカドー南大沢店

子ども部門にはたくさんの小中学生からの川柳が寄せられた。多数の川柳を寄せて頂いた宮上中学校、長池小学校、柏木小学校、南大沢小学校では学校に作品を持ち込み校内提示を行った。さらに、報告書として「わたしたちの南大沢川柳」プロジェクト報告書を作成した。

応募された川柳作品をテキストマイニングの手法を用いて用語分析を行った。その結果用いられた用語の頻度の高い順に①自然、②町、③南大沢、④街、⑤緑、⑥豊か、⑦八王子、⑧溢れる、⑨



#### わたしたちの南大沢 川柳 応募者作品展

##### ご挨拶

2023 年は多摩ニュータウンの南大沢がまちづくり 40 周年になります。一足早く私たちは、南大沢の 40 周年のお祝いとして南大沢に関わる川柳を地域住民の方に募集しました。ボランティア団体「南大沢コミュニティネットワーク(略称: MC ネット)」が主催・企画したものです。

南大沢への思いを川柳にして寄せていただきました皆さんにお礼を申し上げます。お子さんからお年寄りまでの 400 句を超える川柳が集まりました。皆さんの作品を展示させていただきます。どうぞごっくんとご覧いただければ幸いです。

##### 展示予定

10 月 8 日～10 月 23 日 八王子市生涯学習センター南大沢分館  
10 月 26 日～11 月 11 日 八王子市社会福祉協議会 はちまるサポート由木  
八王子市で 2 月 1 日～15 日 由木中央公民センター1 階

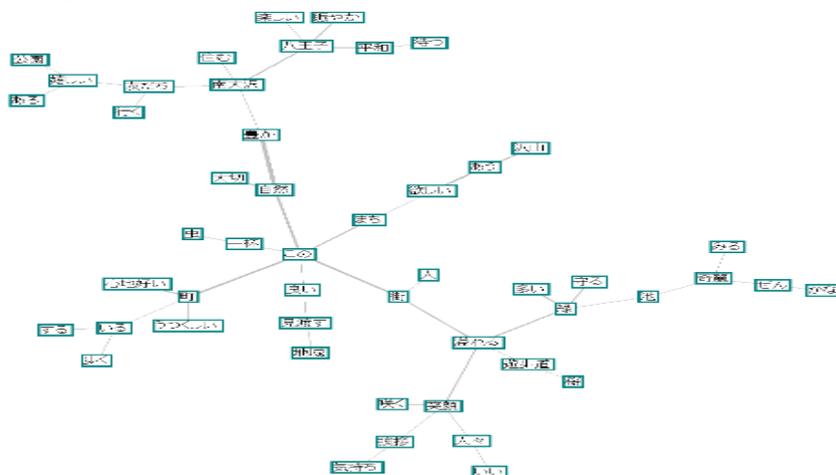
「南大沢コミュニティネットワーク(略称: MC ネット)」について  
私たちは、高齢者しい世代や生活環境の中で、地域の子どもからシニアまで幅広い世代が繋がり、いつまでも楽しく暮らしていけるようにとの発想で、2019 年に発足したボランティア団体「南大沢コミュニティネットワーク(略称: MC ネット)」  
はちまるサポート由木: 042-470-0825  
問い合わせフォーム

主催 南大沢コミュニティネットワーク 後援 八王子市教育委員会  
2023 年南大沢まちづくり 40 周年記念事業の一環として開催いたします

#### 川柳作品展の案内チラシ

奇麗、⑩笑顔の順であった。

需要キーワードの関連性をビジュアル化した結果を見ると「ゆたか」－「自然」が基本的な軸となり、「南大沢」を中心に「八王子」は「たのしい」「にぎやか」「平和」、他方「友だち」と「嬉しい」の相関性が高くなっている。「平和」という言葉が登場しているのも、ロシアのウクライナ侵攻という事態がもたらしたものと推察される。詳細な分析は省略するが「重要キーワードマップ」を参照ください。



川柳の重要キーワードマップ

### b. 子どもの居場所プロジェクト：寺子屋

多摩キャンパス周辺の八王子市立松木小学校、長池小学校で月に1回程度土曜に学校の教室や体育館を借りて子どもの活動を支援する寺子屋活動を実施している。寺子屋の活動内容としては寺子屋学習教室（漢字検定）、ドッジビー、ボッチャ、プログラミングカー、プラ板、万華鏡教室はじめ Xmas や正月ゲームなど季節行事も行っている。その集大成として3月21日(祝)に堀之内こぶし緑地で「竹たま里山まつり」を企画した。

### c. 高齢者の居場所づくり：高齢者サロン

ボッチャはパラスポーツの1種であるが、障がい者スポーツとしてだけでなく、老若男女誰でも、障害の有無を超えて楽しめるユニバーサルスポーツとしてボッチャがオリンピックのレガシーとして定着してほしいと願って取り組んでいる。今年も第7波、8波の感染拡大によりスマートフォン講習やスポーツは中断せざるおえなかった。しかし、上記川柳作りを高齢者サロンで行い、創作した作品を読み合ってお互いが鑑賞しあった。共感したり、笑ったり、しみりしたり、高齢者サロンでの川柳作りの手応えを得ることができた。



イトーヨーカ堂南大沢店での川柳作品展



高齢者サロンにおける川柳作り



サロン参加者と障害者とのぼっちゃ競技

以上のように、学生達にこのような地域社会で、他の団体とのコラボレーションを通じて、子どもや大人にかかわる機会を与えて頂いた「大妻女子大学地域連携プロジェクト」に感謝申し上げる。

# 能登の里海を守る：海育実践と地域活性化プロジェクト

細谷 夏実 教授

(社会情報学部 社会情報学科 環境情報学専攻)

## 1. はじめに

私たちのゼミでは、世界農業遺産にも認定されている能登半島の穴水町で里海里山の保全につながる活動、地元の子どもたちに海の大切さや楽しさを伝える海育（うみいく）の活動などを2015年度から継続して行ってきています。その活動がきっかけとなり、穴水町と本学は包括連携協定を締結しています。

2022年度のプロジェクトでは、子どもたちが海の大切さを学ぶ活動を行うこと、また、能登の里海里山保全についての理解を広め、地域活性化の助けとなるような活動や情報発信を行うこと、を目指しました。

## 2. 活動内容

### 1) 能登での地域連携活動（2022年8月）

2022年度の夏休みには、2年ぶりに現地での活動を行うことができました。今回は特に、石川県立穴水高校および金沢星稜大学のみなさんと共に、穴水町でボラ待ち櫓の再建作業に協力しました。ボラ待ち櫓とは、江戸時代から地元で伝わるボラの伝統漁に使われていた櫓です。現在は実際の漁は行われていませんが、観光用の櫓が町内に数カ所設置されており、そのうちの1つを再建する作業でした。

ゼミ生たちは、地元で櫓の保存に関わっている方から櫓の組み立てについて説明を受け、櫓の基礎を固定する砂袋を作ったり、櫓の材料となる木材を設営場所まで運んだりする作業を行いました。再建の取り組みは地元のケーブルテレビや新聞でも紹介されました。



作業について説明を受けるゼミ生たち



木材を設営場所まで運ぶ



陸上で櫓の組み立て作業を確認する

## 2) 「能登展」での能登の紹介と物産販売 (2022年10月)

ゼミでは毎年、大学祭で「能登展」を出展しています。2022年度は大学祭も2年ぶりに対面で開催され、1) で述べたような地域での活動や能登の魅力をポスターで紹介すると共に、穴水町に自生する椿を活かしゼミ生が地元の方たちと協働で商品化に関わった椿茶など、能登の物産販売も行いました。当日は町役場や教育委員会の方も来校して協力してくださり、ゼミ生は町の法被を着て説明や販売に活躍しました。



穴水町の方たちとゼミ生が協力し準備完了



当日ゼミ生は法被を着てがんばりました  
(左手前が商品化に関わった椿茶)

## 3) 穴水町立向洋小学校の子どもたちとの取り組み (2023年2月～3月)

穴水町には2つの町立小学校があります。そのうちの一つ、中居湾に面する向洋小学校の子どもたちと、2018年度から毎年協働で「うみいくカード」の作成を行っています。

向洋小では3年生のふるさと教育として、小学校の目の前に広がる中居湾で行われている牡蠣の養殖現場の見学を行っています。その見学で学んだことを子どもたちそれぞれが絵と文章で表現し、それを活かして編集し、ポストカードにするという取り組みです。

今回は、これまで5年間に作成したカードをゼミ生たちがパネルに収め、町の教育委員会の協力を得て、穴水駅前にある穴水町さわやか交流館プルードで約1ヶ月展示紹介しました。展示についての感想を来場者の方たちからアンケートで集めたところ、子どもたちの表現力や詳しい学びに感心した、もっと広めてほしい、といった感想をいただくことができました。



5年分のカード展示の様子

今後も、地域の方たち、ゼミの学生たちなどと力を合わせて、里海保全や地域の活性化、子どもたちへの海育など、いろいろな取り組みを行っていきたく考えています。

# 「高齢者聞き書き」で創る交流事業プロジェクト

藏野 ともみ 教授

(人間関係学部 人間福祉学科)

## 1 本プロジェクトの目的

コロナ禍において地域に住む高齢者は、社会的交流が減り、心身に大きな影響を与えられていると言われている。同様に、大学生も大学での対面授業等は始まり徐々に動き始めたものの、ボランティア活動や学外実習等学習面では未だ制限が多く、コロナ前に比べ、多様な形態の学習と活動の機会を奪われている現状を捉えたことから本プロジェクトは始まった。

本プロジェクトは、高齢者を「おはなしさん」とし、その高齢者の話を聞き、様々な思いを文章にまとめる「ききがき(聞き書き)さん」を学生が務め、世代間交流を行う。これらの活動を通して、高齢者の社会的孤立を防止し、学生にとっては多様な人々を知る機会として、コミュニケーション技術を身に付け、コミュニティの一員としての役割について考えることを目的とした。

すなわち、社会的及び家庭的に埋没しがちな高齢者の知恵、見識、主張等をお話しいただき、誰もが読みやすい文章にすること、これらの文章や聞き書きの活動を通してコミュニティ形成を醸成していくためのプロジェクトである。

本プロジェクトを通して期待される効果としては、コロナ禍において社会交流が減っている高齢者の社会的孤立への関わりの1つであると考えられる。また高齢者の話を聴く「傾聴」や「自分史作成支援」と異なり、聞き書きの特徴である高齢者の話を聴いて分かりやすい文章として記し、多くの人に読んで貰うことにあり、本事業の満足感の主体は話し手である高齢者及び聴き手である学生、それを読む読者に均一に求められると考えられる。

高齢者同様に、多様な形態の学習機会や活動を奪われている学生にとって他者の関わりとコミュニケーション技法の学習、成果物として形にすることで達成感等の効果が期待される。



写真1：初めての聞き書き練習



写真2：ロールプレイを見ながら、ポイントを学習する

## 2 実施内容

聞き書きの基礎について演習を交えながら学んだ上で、本プロジェクトの趣旨に賛同くださった高齢者の皆様のお話を伺う機会を設け、学生が文書を作成し、再度、対面で学生と高齢者が話しをしながら、一緒に加筆・修正しながらまとめていくことにした。

今回は、はちおうじ志民塾(主催：八王子市)の卒塾生有志の団体である「とうゆう会」のご協力の下、実際に聞き書きを実践する前に講義と演習を繰り返した。具体的には、人間福祉学科13名の学生に対して、とうゆう会のメンバー4名を講師として迎え、4回に渡り「聞き書き講習会」を実施した。学生同時またはとうゆう会メンバーを相手に聞き書きの体験と、その後良かった点や修正点をデ

イスカッションし、ポイントやコツを学んだ。

その後、八王子市南地区の地域包括支援センター等の協力で紹介を受け、本学までおいで頂ける計7名の高齢者を「おはなしさん」としてお迎えした。学生1名もしくは2名1組で、「おはなしさん」と対面し、2回程聞き書きの実践と文書作成、校正の依頼、再度対面での追記等を行った。さらに、交流事業として、茶話会を開いたり、クリスマスカードや年賀状等を通して交流を行うことができた。

今回共同した「とうゆう会」は、はちおうじ志民塾（主催：八王子市）の卒塾生有志が各自の知識や経験を活かし、ボランティア活動やコミュニティビジネスなどを通じて地域社会に貢献することを目的に立ち上げた団体であり、2013～2014年度に聞き書きについて独立行政法人福祉医療機構の助成事業として行ってきた実績を持つ。教員とどのような教材で学生に講義と演習を行うか、学生一人一人の聞き書きの特徴に対するアドバイスはどのように行うか等を協議しながら進め、実際の場面では高齢者との橋渡しを行って頂いた。



写真3：1回目の聞き書きを終えて



写真4：聞き書きの様子

### 3 考察

実施後、学生は「聞き書き」に初めて触れ、基礎学習の際に、他者の話しを「聞くこと」「質問をしながら話しを深めること」「書くこと」を同時に行う難しさを実感し、相手の行間に込められた思いを汲むことがどれ程大変なことかを感じるようになったと感想を述べている。

さらに、実際に「おはなしさん」を目の前にすると、緊張し、お話しになることを漏らさないように書き留めることに集中することもあり、改めてコミュニケーションの深さを考える機会となった。

また、お話しになる方の人生、時代背景、地域の状況等を理解することの必要性についても実感したとのことであった。緊張感漂う聞き書きの時間と異なり、交流会となると話しが弾み、相互に感想を伝え合ったり、自分の好きなことを話す等、学生の自分たちらしさを発揮できていた。

今後、学生は、将来介護・福祉専門職や、企業での営業職等を目指すことになるが、それぞれの進路の中で、違う文化や世代の人々とお話しをさせて頂くこと等も多いと考えられる。「実習での経験があったので、緊張しないと思っていたが、初対面の人の人生を理解しながら聞く難しさがあり、その人を知ろうとしなければ、お話しは聞いていたつもりでも文章としてまとめることができない」との気づきなどを活かしていくことが期待される。

#### 参考文献

- ・市川一宏「コロナ禍における高齢者保健福祉を考える」2021年度東京都社会福祉審議会資料
- ・日本能率協会総合研究所「新型コロナウイルス感染症影響下における高齢者の心身への影響」中間報告、  
『令和2年度老人保健健康増進等事業(老人保健事業推進費等補助金) 新型コロナウイルス感染症影響下における通いの場をはじめとする介護予防の取組に関する調査研究事業』
- ・駒谷なつみ他「高齢者への聞き書きを通して看護学生が学んだこと」『保健科学研究』第8巻1号2017年

## 医療的ケア児童のファミリーフォト展

丹野 眞紀子 教授

(人間関係学部 人間福祉学科)

2022年10月29日(土)・30日(日)の2日間にわたり、医療的ケア児のファミリーフォト展を実施した。「医療的ケア児」とは、生存のために高度の医療技術(たんの吸引や経管栄養など)の医療的ケアを日常的に必要とする子どもたちのことを言う。厚生労働省は在宅で生活している医療的ケア児は2万人いると推計している。リスクの高い妊娠に対する医療技術の進歩や高度な新生児医療等の充実、周産期医療ネットワークグループの構築が推進される中、この10年間で医療的ケア児は10倍にも増えている。そのような中、2021年6月11日、参議院本会議で「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」(以下、「医療的ケア児支援法」)が可決された。これまで医療依存度の高い子どもの在宅療養はほぼ家族の力だけで担われていた。また、子どもが登園・登校する場合、家族がつきっきりで痰の吸引などの処置を担ってきた。医療的ケア児を預かる施設は極度に不足し、結果として、保護者が24時間医療的ケアを担うことになる。こうした医療的ケアの必要な子どもを取り巻く環境は、社会資源の不足、医療と保育・教育の連携の難しさなど、法律はできたとはいえ、さまざまな問題を抱えている。こうした現状は、残念ながら一般にはあまり認知されていない。

このような状況下の医療的ケア児やその家族に対して、支援を続けてきたのがキッズファム財団である。キッズファム財団は、国立成育医療センター内に併設されている医療型短期入所施設もみじの家の利用者や家族への支援を行うとともに、啓発事業として、写真スタジオ等で記念写真を撮ることが難しい医療的ケア児童と家族のために、ファミリーフォトプロジェクトを行っている。今回、キッズファム財団の協力を得て、展示許可を頂いた家族の写真展を開催する。

「医療的ケア児のファミリーフォト展」展開までの活動は、以下である。

6月17日 キッズファム財団とファミリーフォト展について第1回打ち合わせ(オンライン)

6月24日 キッズファム財団、学生と第2回打ち合わせ(オンライン)

7月7日 ファミリーフォト展の後援依頼を多摩市社会福祉協議会に行う。

7月28日 キッズファム財団と学生との第3回打ち合わせ(対面)

学生が、医療的ケア児の理解をより深めるために、キッズファム財団の方に大学に来校頂き、医療的ケア児の状況、「もみじの家」の紹介等、映像を交えて講義をお願いし、その後学生たちと展示についての打ち合わせを行った。

9月22日 キッズファム財団と学生の第4回打ち合わせ(オンライン)

9月29日 キッズファム財団と学生の第5回打ち合わせ(オンライン)



当日配付資料は3点

1) 今ファミリーフォト展のパンフレット

(学生たちが今回の展示のために400部作成し、展示の案内時に配布するとともに、説明を行い、2日目の午前中に配布終了となった。)

2) キッズファム財団のパンフレット

3) 医療的ケア児のパンフレット

(2と3は、キッズファム財団が持ち込み、当日の資料とした。)

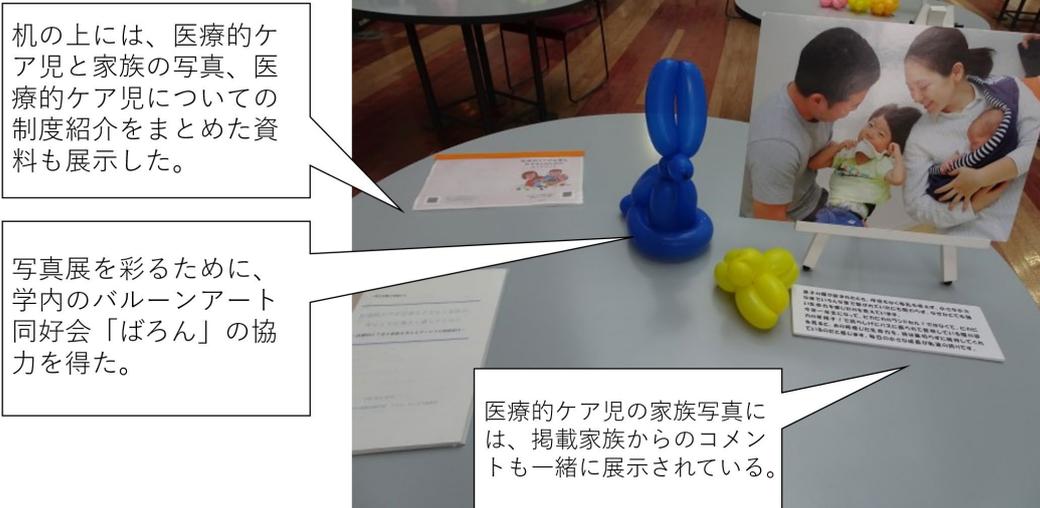
10月28日 学生達による、展示に向けての事前準備、パネル作成等

10月29・30日 医療的ケア児童のファミリーフォト展実施



当日の展示はファミリーフォトが中心であるが、それ以外にも、医療的ケア児の現状、医療的ケア児をサポートする社会福祉の制度、ファミリーフォトを作成するキッズファミ財団の紹介など、展示会を見に来た方に、少しでも医療的ケア児について理解を深めて頂けるように多くの資料を作成し、展示した。

写真展示の際は、次のような工夫をした。



大妻祭当日は、キッズファミ財団と学生以外にも、ボランティアとして丹野ゼミの4年生も加わり、フォト展示以外に、医療的ケア児童の映像展示、来場者に対して、医療的ケア児の説明・展示の解説などを実施した。大妻祭の2日間で400名以上の方にご来場いただいた。医療的ケア児の抱える問題を学生や地域の方々にも身近に感じて頂けたと実感している。



展示の様子

当日の様子

学生が作成した  
フライヤー

## 気仙沼市における「ご当地グルメづくり」による復興支援活動

干川 剛史 教授

(人間関係学部 人間関係学科 社会学専攻)

**1 本プロジェクトの目的**：東日本大震災被災地の気仙沼市において「気仙沼ご当地グルメの会」と連携しながら、また、地域食材を活用した地域おこしの専門家の協力を得て、現地の魚介類等の食材を活用した「ご当地グルメづくり」を通じて被災地の復興を支援することである。

**2 活動内容**：プロジェクト代表者の干川は、「気仙沼ご当地グルメの会」代表者で不動産会社「十人十色ライフサービス(株)」代表取締役社長の一色法人氏と連絡調整を行いながら、また、鹿児島県等の全国各地で地域食材を活用した「ご当地グルメづくり」の豊富な経験と実績を持つ榎木春幸氏に、現地の魚介類等の食材を素材とした「ご当地グルメづくり」について助言・指導を依頼した。

まず、2022年8月13日に干川と「気仙沼ご当地グルメの会」代表の一色氏が、「ご当地グルメづくり」検討会の企画及び地元メディアや SNS を活用した協力団体関係者や飲食店関係者等への参加の呼び掛けについて打ち合わせた。



写真1 Zoomによるオンライン検討会の様子



写真2 パワーポイント資料を表示したパソコンの画面

そして、写真1・2のように、同年10月22日に「一色十色ライフサービス(株)」の事務所に、一色氏、干川と干川ゼミの学生3名、「一般社団法人 気仙沼倫理法人会」専務幹事の千葉 健氏が集まり、榎木氏とZoomでのオンラインで検討会を実施した。まず、干川が、これまでの気仙沼市での「ご当地グルメづくり」の活動をパワーポイントで説明し、その後、榎木氏と学生を中心に気仙沼市での「ご当地グルメづくり」の今後の課題について意見交換を行った。

**3 活動の成果**：気仙沼市における「ご当地グルメづくり」は、写真 3・4 のようなこれまでの活動を振り返りながら、一色氏と千葉氏が協力者を募って、図のように、気仙沼商工会議所や気仙沼市の協力の下に気仙沼市内の官民の連携体制を作り出した上で、榎木氏の支援を受けながら今後展開して行くという方策が導き出された。



写真 3 榎木春幸氏の「桜島灰干し」に関する講演  
(2016年3月12日気仙沼市松岩公民館)



写真 4 「宮城県倫理法人会」の「イブニングセミナー」  
での榎木春幸氏の「ご当地グルメづくり」講演  
(2022年6月14日「気仙沼ホテル 一景閣」)

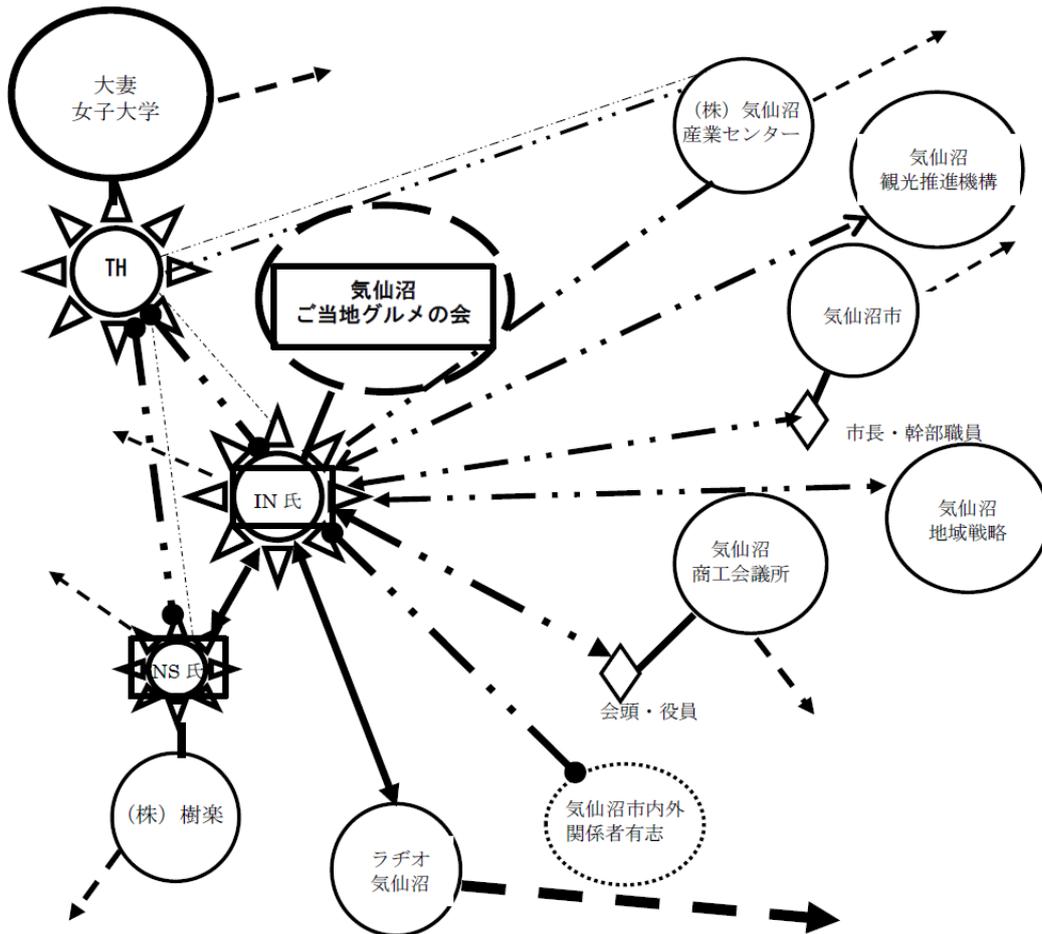


図 「デジタル・ネットワーキング・モデル」によって描出した気仙沼市における復興に向けての課題に取り組む地域内外の人々と団体の間の連携体制

## 学ぼうみんなのさいこうの笑顔のために

堀 洋元 准教授

(人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻)

本プロジェクトは、ゼミ学生が地域の方々と連携して行う出前防災講座として始まり、2016年度から継続して取り組み、今年度は7年目を迎えた。

1年目は「女子大学生の視点を活かした出前防災講座」というプロジェクトテーマで多摩市総合福祉センター、多摩市社会福祉協議会と連携して活動した。その成果は、多摩市総合福祉センターで開催された福祉大会において「女子大生による出前防災講座～大妻女子大学のゼミ生が独自の視点から考えた体験型の防災講座！」として行われた。2年目は「学生の視点と地域のニーズを活かした出前防災講座」として多摩市総合福祉センター、多摩市社会福祉協議会と連携し、地域住民への事前アンケート調査をふまえて実施した。その成果は、福祉フェスタ 2017（多摩市総合福祉センターで開催）において「今日からできる5つの防災対策」として行われた。3年目は「唐木田発：学生と地域でコラボする体験型防災講座」として、多摩市社会福祉協議会、ほっとネットしょうぶ（唐木田・中沢・山王下等地区地域福祉推進委員会）の有志と連携して活動した。その成果は、大妻多摩祭（大妻女子大学多摩キャンパスで開催）の展示企画のひとつとして、体験型防災講座を行った。4年目は「体験から学ぶ防災～防災と言わない防災を目指して～」として、昨年度に引き続き多摩市社会福祉協議会、ほっとネットしょうぶ有志と連携して活動を行った。5年目は「“防災と言わない防災”の実現に向けた私たちのチャレンジ」として、コロナ禍で活動が制限される中、多摩市 ONLINE 文化祭にエントリーして、日常における防災の取り組みについて発信する機会を得た。6年目はコロナ禍による影響が続く中でオンラインによる防災食レビューや震災語り部からの学び、そして地域防災講座での地域の方々とグループワーク参加など、今できる取り組みを行った。今年度は全面的に対面で精力的に活動を行った。その取り組みについて報告する。



大妻多摩祭でのフライヤー

### 〔目的〕

プロジェクト活動7年目である今年度は、本プロジェクトは「防災」をキーワードに、学生が地域の方々と連携して地域防災力向上への一助を目指すものである。ゼミ学生を中心としたこのプロジェクトは、独自の防災イベント実施を活動の成果と位置づけ、2016年度から継続して今日に至っている。防災に関する知識を体験的に学び、身につけた学びを地域の方々に拡散し共有することが目的である。

今年度のタイトルは4年生による昨年度の活動をふまえ「みんなで防災大作戦！～防災を日常に～」につながるメッセージをもとに3年生が命名した。今年度のプロジェクト名は『学ぼう みんなのさいこう（最高）の笑顔のために』とした。地域の方々にも親しみやすいよう「防災」という言葉を直接使わず、タイトルに「ぼうさい」の文字を隠すことで堅いイメージをなくした。また、防災についての知識を身につけ、地域の方々に安心・安全に笑顔で過ごしてほしいという学生からの機知に富んだメッセージである。

## 【プロジェクトの概要】

**1. 前年度の活動報告と引き継ぎ 今年度の活動計画** 4年生が3年生に向けて、前年度の活動報告を行った。オンラインで実施した防災食体験、地域住民対象の防災講座で行ったグループワーク、学外防災施設での災害対応に関する体験学習についてスライドを用いたプレゼンを行い、今年度は対面での活動を視野に入れて精力的に取り組む方針を確認した。

**2. 学外防災施設での体験的学び** 夏休み期間中に、都内にある防災施設での体験学習を行った。そのエリア東京ではリアルに作られた地震直後の東京を歩きながらタブレット端末を使ってクイズに答え、直下地震にどのように対応すべきかを学んだ。また、本所防災館（写真右）では過去の大震災を再現した地震の揺れ体験、煙火災を想定した避難行動体験、局地的集中豪雨を想定したドアの開放体験などを行うことで災害の危険性について知り、自身の防災対応力を自覚する機会にもなった。



**3. 体験的な学びを活かす ～大妻多摩祭での体験展示～** 10月に行われた大妻多摩祭（写真右）では、学内外での体験学習の中からPETボトルでの心肺蘇生法訓練、PETボトルでのランタン作り、防災食の食べ比べ体験、マンホールトイレや段ボールベッド、携帯用浄水器、ゴミ袋を使ったシェルター展示を行い、2日間で100名を超える参加者があった。「体験して学ぼう」とのキャッチフレーズ通り、多くの来場者が防災を体験的に学ぶ場となり、企画した学生にとっても自分たちが興味を持った防災体験や知識を親しみやすく発信する貴重な機会となった。



**4. 地域住民対象の防災講座への参加と地域の方々との交流** ほっとネットしょうぶ（唐木田・中沢・山王下等地区地域福祉推進委員会）の定例会（写真右）で防災講座を実施した。大妻女子大学との連携講座「防災について」の講演および成果報告を行った。成果報告では学生がプレゼンテーションを行い、地域の方々にとって気がかりなこと、防災ゼミでの取り組みに関する意見を集計した内容の発表を行った。今回得られた意見やニーズを参考にして、地域の方々に向けての協働活動を提案する非常に貴重な機会となった。



**5. 在宅避難を想定したアレンジ料理の体験学習** これまでのプロジェクト活動を通して「食」に対する興味や関心が多く、学生のみならず地域の方々のニーズもあったため、防災食の食べ比べだけでなく日常でよく利用する食材、保存がきく食材を使って簡単に調理できるアレンジ料理実習を行った。これまでは実際に防災食を食べてみて、食糧備蓄を見直す取り組みをしてきたが、冷蔵庫に保存しているものも含めてローリングストックを実践してみることで、新たな課題も見つかった。

## 【プロジェクトの効果と今後の展望】

今年度プロジェクトの中心となった3年生は、入学当初からオンライン授業で学ぶことが多かった世代であったが、今年度のプロジェクト活動では学内外で対面での取り組みを精力的に行った。コロナ禍で思うように活動できなかった世代がなしえなかった取り組みを積極的にそして主体的に進めており、地域だけでなくSNSを利用した発信も行い、大いに活動成果を形にすることができた一年であった。防災と日常をひとつにしていくための活動をアップデートしながら今後も継続していく。

## からきだ匠(たくみ)カフェ～地域がつながる場所～

八城 薫 教授

(人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻)

多摩キャンパス(唐木田)周辺は病院、福祉施設、教育施設など様々な施設が存在し、身体や心に不安を抱えても安心して暮らすことの出来る環境が整っています。そこで働く専門家(匠)集団が連携して吸引役となり、日頃から地域の様々な属性、世代の方々と繋がるような居場所づくりをすることで、いざという時に助け合えるような地域でありたい。そんな思いから2017年度4月、あい介護老人保健施設、社会福祉法人 楽友会、多摩市社会福祉協議会の方々との連携で活動をスタートさせ、このプロジェクト“からきだ匠カフェ～地域がつながる場所～”が生まれました。

「からきだ匠カフェ」は、この2022年夏に「文具とピザの店」から「ドローンとピザの店」にコンセプトを変えて新装開店した“Planet Café(プラネット カフェ)”さんにご提供いただき、毎月第4水曜日の14時から2時間ほど、開催しています。新型コロナウイルス感染再拡大により、7月・8月は実施することができませんでしたが、9月から活動を再開し、その後は3月まで毎月活動を行うことができました。



リニューアルしたプラネットカフェ

主な活動内容は以下の通りです。

### 6月22日(水)

#### テーマ:みんなでハマっていること(マイブーム)を話そう!

多世代、多属性の参加者が興味あること、ハマっていることを話し合い、楽しみました。

(7月、8月はコロナ感染拡大により中止しました)

### 9月28日(水)

#### テーマ:認知症企画—物忘れのお話し。気になる事は聞いてみよう

話題提供: 天本病院 地域認知症支援センター 認知症看護認定看護師 曾谷 真由美氏

認知症に関する基礎知識と生活のコツについてお話しいただいた後、多世代、多属性で上記のテーマについて話し合いました。

### 10月26日(水)

#### ドローン体験会1—ドローンでピタゴラスイッチにチャレンジ

話題提供: プラネットカフェ

ドローンカフェにリニューアルしたプラネットカフェ様より、ドローンについての紹介や体験会を実施していただきました。

### 11月30日(水)

#### ドローン体験会2—ドローンで魚釣りゲーム & タッティングにチャレンジ

10月に引き続き、プラネットカフェ様にドローン操作を体験できる楽しいゲームを用意していただきました。また他には長年匠カフェに通ってくださっているタッティング(編み物)の匠にタッ

ディングを教えてくださいました。それぞれにチャレンジしながら、楽しい会話が弾みました。

### 12月21日（水）

#### クリスマスのオーナメントづくり

折り紙を使ったクリスマスオーナメントづくりを行いました。動画や作り方の資料を見ながら、それぞれ協力し合い、夢中になって作成。最後は作ったオーナメントをクリスマスツリーのタペストリーに飾りました。おしゃべりしながら年内最後の匠カフェの楽しい時間を過ごしました。

### 1月25日（水）

#### 新年会（ドローンを使った対抗戦）

例年に倣い、まずは「今年の抱負を一文字で」を実施しました。その後は、ドローンを使って経衰弱ゲームで楽しみました。

### 2月22日（水）

#### 回想カルタで遊ぼう

参加者の方が提案し持参してくださった回想カルタを使って、交流を楽しみました。

### 3月22日（水）

#### 次年度からの匠カフェについて話し合う

今年度最後の匠カフェは、次年度から運営メンバーの入れ替わりとなるため、これまでの活動の振り返りと、今後の匠カフェの活動について、参加者それぞれの立場から意見や提案、要望などを話しました。

#### 「からきだ匠カフェ～笑顔の咲くところ～」

からきだの道に 百本シダレ  
桜咲くこの街に はじまる物語  
からきだ通りに 咲くハナミズキ  
唐木田のこの店に 集まる屋下がり  
歳のせいだとか 病気のせいとか  
そんなことは忘れて 笑顔咲くところ  
からきだ匠カフェ だれもが匠だね  
笑顔と歌で 広がってく  
世代を超えて 僕らをつなげる 架け橋さ

#### 匠カフェのテーマソング



9月 認知症企画の様子



10月・11月 ドローン体験会



12月 クリスマスオーナメントづくり

## 障害者雇用企業との連携による多摩祭 T ボール大会の開催

山本 真知子 准教授  
(人間関係学部 人間福祉学科)

大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科は、高等教育機関として全国で唯一、厚生労働大臣指定を受け、ジョブコーチ（職場適応援助者）養成に取り組んでおり、障害者の就労支援機関や障害者雇用企業にジョブコーチの人材を輩出しています。それらを背景に、多摩地域にある大手企業の特例子会社（障害者雇用を進めることを目的に設置された子会社）等から成る「多摩障害者雇用企業連絡会」と、大妻女子大学人間関係学部の有志が連携し、働く障害者のためのスポーツ大会として、多摩祭の2日目に合わせて「多摩祭 T ボール大会」を開催するものです。「T ボール」とは、ソフトボールを土台にした球技で、ピッチャーがボールを投げる代わりに、ティーの上に置いたボールを打つことで、障害のある人、高齢者、子ども等、幅広い層の参加を容易にしています。

### 1. 大会の様子

本年度は、令和4年10月30日（日）に多摩キャンパス人口芝グラウンドにおいて「令和4年度 多摩祭 T ボール大会」を開催しました。今年度は、6社6チームが参加し、3チーム2ブロックでリーグ戦を行い、各ブロックの1位のチームが総合優勝を争いました。コロナ禍により2年半近く T ボール大会を行えていなかったため、実行委員の学生自身も T ボール大会を経験しておらず、準備も手探りの状態からスタートしました。しかし、実際に開催してみると、久々に青空の下でスポーツを出来る爽快感もあって、プレーヤーと応援参加者が一体となって大いに賑わいました。当日は久しぶりの対面開催となった大妻多摩祭もあったため、学園祭を見に来られた方もグラウンドまで足を運んで試合を見学する様子も見受けられました。

この大会は、人間福祉学科のジョブコーチ養成課程で学ぶ3・4年生で実行委員会を結成し、準備と当日運営にあたりました。また、それ以外にも、2年生にボランティアを呼びかけ、合計26名の学生が参加しました。実行委員の3・4年生は運営に関わる裏方仕事を行い、授業で募集した2年生が各チームに入って特例子会社の方々と一緒にプレーをし、各チームに入って応援を盛り上げました。学生たちは、朝のうちは緊張していましたが、各チームの皆さんに温かく迎えて頂き、気さくに話しかけて頂くことでリラックスし、午後はずっかり溶け込んでいる様子でした。また、運営には、東京 T ボール連盟が全面的に協力して下さり、多数の審判が駆けつけて下さいました。このように、企業側スタッフ、学生、教職員、審判のボランティアなど、多くの人々の協力によって、これだけ大きなイベントが多摩キャンパスで開催されることは大変意義のあることと考えます。



当日の朝の準備の様子



多摩キャンパスの人工芝グラウンド

## 2. 大学と企業の連携をする利点

本事業は大学、企業双方にとって多くの利点がありますが、以下に簡単に整理してみます。

### <企業側の利点>

会場の確保： T ボール大会ができる会場確保は容易ではありません。大妻多摩キャンパスのグラウンドを使用できることは非常に大きな利点です。

学生との交流： 単に会場を利用するだけでなく、学生が各チームに入って障害のある参加者と交流することが、大会を明るく楽しい雰囲気盛り上げることに大きく貢献しています。「大妻での T ボール」は障害のある従業員にとって、楽しみな年間行事となっています。

### <大学側の利点>

障害のある人との交流： 福祉学を学ぶ学生にとって、学内のイベントで障害のある人と交流できることは貴重な学びの機会となっています。コロナ禍においてはボランティア活動が一切できなくなりました。大学内で T ボール大会が行えたことで、学生がボランティアをする機会を再び得られることに繋がりました。また、福祉施設で行うボランティアや社会福祉士実習と異なり、障害のある人と「支援する側・支援を受ける側」といった関係でなく、自然な立場で交流できることは、「障害者=福祉サービスの対象」といった固定的な考えを打ち破り、より柔軟で広い視野を持つために重要な機会となっています。

企業との連携： 人間福祉学科では、平成 30 年度に厚生労働省より、高等教育機関として初めて職場適応援助者（ジョブコーチ）養成研修機関の指定を受けました。最近では、大企業の障害者雇用部門においてジョブコーチのニーズが高まっており、大妻で社会福祉士や精神保健福祉士の資格を取得し、ジョブコーチ養成研修を修了した人材の採用に興味を持つ企業も増えています。既に複数の企業において、この T ボール交流大会を経験した大妻の卒業生がジョブコーチとして活躍しています。今後も、T ボール交流大会を通して障害者雇用企業との連携を維持していきたいと思えます。



当日の大会の様子



表彰式の様子

## 3. 今後に向けて

ボランティアとして各チームに入った学生からは、「最初は緊張したが沢山話しかけてもらって楽しむことが出来た」「普段の仕事の話聞かせて貰って自分も頑張らなければと感じた」「ジョブコーチの仕事にますます興味が高まった」など、授業では得られない経験が出来た喜びが表現されていました。また、参加企業からも多くのコメントが寄せられ、特に準備、運営を仕切った実行委員の学生に対しては、「熱意と真面目さを感じた」「企業としてこのようなイベントを作れる人材を欲している」など高く評価する意見を頂くことが出来、大学と参加企業の双方にとって意義のあるプロジェクトとなったと感じます。今後、障害者雇用企業が増加する中で、大学としての人材育成を行い社会へ送り出すとともに、在学中からの企業との連携を強化していきたいと考えています。

## 地域の多世代がつながるみそ作りプロジェクト

富永 暁子 准教授

(短期大学部 家政科 食物栄養専攻)

本プロジェクトの目的は、多世代交流による「みそ作り」の食育活動を通じた地域の活性化である。令和3年度より本プロジェクトを実施しており、今年度は2年目となる。

多世代交流を目的としたこの「手作りみそ講座」では、神田明神の「三河屋綾部商店」から、「千代田区産の麴」をはじめとして、大豆など材料を調達するとともにみそ作りに関する多くの助言を得るなど、地域連携をとることも出来た。昨年度はオンラインでの開催であったが、今年度は対面で実施し、千代田区在住・在勤者を対象に手づくりみそ講座を2回実施した。またSNSを利用して参加者に対してみその熟成状態のフォローアップを行った。さらに昨年作成したみそを使って近隣の高齢者施設や保育園で汁物に利用してもらい、ここで作成したみそを通して交流会を実施することが出来た。

### 【プロジェクトの活動内容】

#### 1. 大豆の栽培・収穫体験【7月～11月 学内ハーブ園の一部使用】

昨年よりも大豆の定植時期などを考慮して栽培したが、収穫出来た大豆は80粒程で、収穫率は低かった。同時にみそ料理の作成のためになすなどの夏野菜を栽培したが、こちらは豊作であった。これらを今回のみそ講座のみそ料理に一部利用した。

#### 2. 手作りみそのフォローアップ・ネットワークづくり【8月～】

主に前年度作成したみその発酵・熟成状況のフォローを目的に、InstagramとLINEを立ち上げた。

#### 3. 手作りみそ講座①【11月5日(土)14時～16時「合わせみそ作りとみそ料理の試食」】

先着順により決定した参加者は0才から70代まで幅広く、スタッフと合わせて、約60名が参加した。0.6%塩分で調整したウェルカムみそ汁を飲んだ後、各自で白みそと赤みそで合わせみそを作り、その後の8品のみそ料理の試食してもらった。学生による「みそに関する食育クイズ」では盛り上がり、多世代交流をすることができた。



栽培の様子



合わせみそ作りの様子



みそ料理の試食の様子



食育クイズの様子

#### 4. 手作りみそ講座②【1月28日(土)14時～、15時～「手づくりみその仕込み」】

抽選により決定した参加者52名と学生及び卒業生を含むスタッフ14名の計約70名が、みそ作りに参加した。みその作り方のレクチャーを受けた後、4～5人の小グループに分かれ、スタッフの進行に合わせてみそ作りをし、多世代交流をした。当初の予定では、手づくりみそを使ったみそ汁交流や食育クイズなどを行い、多世代交流を深める予定であったが、参加者が多かったことと、新型コロナウイルス感染症対応の理由で、時間を短縮し、さらに2回に分散して講座を開催した。

## 5. 出来上がったみその利用【10月、2月】

昨年仕込んだみそが10月以降食べ頃を迎え、それらのみそを使って近隣の高齢者施設では「なすの味噌汁」、保育園では「豚汁」にして試食をしてもらった。いずれでも大変好評であった。



### 【参加者のアンケート結果】

手づくりみそ講座①：みそが体に良いことがわかった、こどもの食育につながる、クイズ形式での学びが良かった、多世代で一緒に学んでいる会場の空気感が良かった等があり、今後も区内の調理室で出張講座を検討して欲しいなど継続を求める声が多くみられた。

手づくりみそ講座②：参加者の9割以上が満足であるとの回答があり、また同様の講座があれば参加したい人が100%であった。多世代交流が出来たかどうかに対しては出来たと思うと回答した人が半数程度であった。同じテーブルのみなさんと味噌、大豆の話が咲いた、またぜひ家庭で家族と作ってみたいと思った、味噌が身近に感じられ味噌汁だけではなく、色々工夫して取り入れたいとなりました、茹でた大豆のいい香りがほっとしましたなどの感想が多くみられた。

### 【今度にむけて】

区内の組織や企業などと連携し、場所や原料の提供をしてもらうとともに、みそ作りのスタッフを養成し、さまざまなコミュニティでみそ作りを通して多世代交流できるような仕組みを提案したい。次年度は千代田区内の施設での開催が決定しており、現在具体的な日程を調整中である。このプロジェクトでの経験を活かし多世代交流を目的とした手づくりみそ講座が大妻から発信できるようにしていきたい。

なお前年度の取り組みについては、第69回日本栄養改善学会学術総会（岡山県）にて報告をした。

プロジェクト構成員：小野友紀、石井恵子、ワゲラ久美子 食物栄養専攻の1,2年生及び卒業生有志

プロジェクト協力者：小林雪子

## 食と環境の調和に向けた食育の推進

### ～産学官民連携による実現を目指して～

堀口 美恵子 教授

(短期大学部 家政科 食物栄養専攻)

#### 【目的】

栄養・食を通じて人々の健康と幸福に貢献する栄養士を養成する本専攻では、食育に関連した地域貢献活動を多世代に向けて10年以上積極的に行っている。本プロジェクトでは「食と環境の調和」に着目した食育活動を産官学民連携で取り組み、持続可能な食を支える食育、及び、生涯を通じた心身の健康を支える食育を推進する体制を千代田区等で実現することを目指した。

#### 【方法】

代表者が今まで培ってきた千代田区との関わりを活かし、栄養士を目指す本専攻の学生が卒業生と連携しながら、食と環境の調和に向けた食育の推進に向けた取り組みを行った。

#### 【主な活動内容】

##### 1) 千代田区における主な活動

- ① 千代田区社会福祉協議会公認子育てサロン登録団体「就学準備教室 りりーふ」主催の「千代田こどもの芸術祭」に運営協力者として参加し、野菜と環境に着目した食育活動を行った。農林水産省の「野菜を食べようプロジェクト」の野菜サポーターとして、パネルシアター公演や野菜マグネット作り等を通じ、食と環境の大切さについて楽しく伝えることができた。



- ② ちよだボランティアセンター登録団体「千代田ママのわ」主催の「親子料理教室」へ、お月見をイメージしたレシピ（お焼き2種・海老しんじょのお吸い物）を提供した。親子が食材を無駄なく使う事や効率的な調理操作についても関心を持ってもらうように工夫した。また食材に関連した魚食の教材（大日本水産会による提供）の配布、及びお月見に関する歴史と浮世絵紹介（本学文学部日本文学科教員による提供）も行い、和食文化について親子の興味を広げることができた。



- ③ 千代田区主催の「アーバニスト@千代田」の一環として、「身体を動かす！一緒に楽しむ！つながる！合同体験会」を本学アリーナで2回実施した。「千代田区立障害者福祉センター えみふる」、「上智大学インカレボランティア団体 シャクル」、「一般社団法人エスコートダンス協会」、「大妻女子大学食育ボランティアグループ ぴーち」のアーバニスト4者によるボッチャ、ウォーキ

ングサッカー、エスコートダンス、和ぐるみ作品作りを通じ、区民の心身の健康づくりや多世代交流に寄与することができた。



- ④ 「大妻和食アカデミー」を本学調理室で2回実施した。米と海苔がテーマの回では、新米や海苔に関する講座や食べ比べ等を通じ、古来より環境に配慮して生産されてきた米や海苔について理解を深めて頂くことができた。魚がテーマの回では魚食と環境に関する講座や伝統的な板蒲鉾作り等を通じ、水産業とSDGsとの関連について理解を深めて頂くことができた。



- ⑤ 千代田区地域コミュニティ醸成支援事業である「ちよだコミュニティ ラボライブ！2023」に参加した。「私と千代田のストーリーをシェアしよう！」をテーマに区内団体同士で意見交換を行うと共に本プロジェクトの成果の一部を報告し、評価を得ることができた。また、次年度に向けて新たなネットワークを構築することもできた。

## 2) その他の活動

- ① 都内の子ども食堂で、食育活動を3回実施した。規格外として廃棄されてしまう食材（世羅梨、サンチュ等）も活用した食事の提供も通じ、食と環境の大切さを伝える事ができた。



- ② 「大妻祭 2022」と「大妻さくらフェスティバル 2023」においても、食と環境の調和に向けた食育活動を行うと共に本プロジェクトの成果の一部を発表し、評価を得ることができた。



## 【まとめ】

身体と地球に優しい和食への関心を高めることも含め、産官学民連携により食と環境の調和に向けた食育活動を対面で実施し、区民の心身の健康増進に寄与することができた。また、食を通じて人々の健康と幸福に貢献する栄養士を目指す学生が主体的に取り組む本活動は、学生の学習意欲向上やキャリアデザインにつながる事が期待された。

## 地域に根ざす図書館認知症カフェプロジェクト

深水 浩司 常勤特任准教授  
(教職総合支援センター)

本プロジェクトは、多摩市立図書館、大妻女子大学教員と図書館サークル OLIVE、多摩校図書館司書課程受講者、社会医療法人河北医療財団多摩事業部 天本病院勤務医師と日本うつセンター勤務精神保健福祉士・公認心理士との連携によって企画・実施された図書館カフェである。

主催は多摩市立図書館で「高齢者と家族のための図書館カフェ」と題し、本プロジェクトが共催、医療従事者は協力という体制をとった。

参加者募集は多摩市立図書館と本プロジェクトで分担しポスターを作成し地域掲示板等に貼り出し、合わせて多摩市広報誌『たま広報』や多摩市の Web での宣伝も行った。10 組限定での募集だったが、実際には 4 組の参加となった。日程は以下の通りである（参加者は 2 回とも参加できることを条件に募集）。

2022 年 9 月 11 日（日）  
研修（医師、心理士から  
高齢者の特徴や接し方を  
学ぶ。学生と教員、図書  
館担当者が対象。）



研修の様子（2022 年 9 月 11 日）

10 月 22 日（土） 1 回目 興味や好きな本について語り、資料（本）の選択と貸出



参加者全員で好きな本について語り合う  
(2022 年 10 月 22 日)



参加者と学生で選んだ本  
(2022 年 10 月 22 日)

11 月 5 日（土）  
2 回目 貸出本の感想や、  
読書・図書館について  
ディスカッション



参加者と担当学生との談話  
(2022 年 11 月 5 日)



参加者全員でのディスカッション  
(2022 年 11 月 5 日)



# 令和4年度 地域貢献プロジェクト報告

## 地域貢献プロジェクト概要

### 1. 趣旨

広く地域のみなさまへ本学の教育と研究成果を還元し、みなさまの多様な学習ニーズに応えるとともに、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動の推進を図ることを目的に、その活動経費を補助する。

### 2. 対象テーマ

本学の教育と研究成果を地域社会に還元し、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動。分野は不問。

### 3. 応募資格

- ・ 本学の教職員（個人又はグループ）
- ・ 本学の教職員と学生（大学院生・短大生を含む）で構成されるグループ

※学生のみでは応募不可。

※申請代表者は専任教職員に限る。

※申請代表者としての申請は1件に限る。

### 4. プロジェクト支援期間

令和4年5月12日(木)～令和5年3月31日(金)

### 5. 支援額及び採択件数

支援額：1件につき30万円を上限

採択数：数件程度

## 地域貢献プロジェクト採択一覧

プロジェクト名	代表者
子育て世帯を食で支えるプロジェクト	岩瀬 靖彦
小学校の読書活動推進への貢献を図る学生ブックソムリエの展開	樺山 敏郎
健康への食意識向上の情報とがンを支える期間限定「がんと健康的な食事・食べ方通信」の定期的配布と取り組み	川口 美喜子

## 子育て世帯を食で支えるプロジェクト

岩瀬 靖彦 教授  
(家政学部 食物学科)

現代の子育て世帯は、かつては親族や近隣から得られていた支援が得られにくく、育児の負担感や孤立感が大きいといえる。また、子育て情報に、SNS やアプリケーションなどの活用により、かつてより便利になった反面、「情報量が多すぎて正確な情報がわからない」という困りごとも増えている。このような現代の子育て世帯の状況を支援するために、管理栄養士・栄養士養成を担っている大妻女子大学の専門性を活かし、最新のエビデンスを踏まえた食に関する講習会を開催することとした。乳幼児の育児中は子のケアに時間をとられ、外出が難しくなることも多いことから、オンラインと対面のハイブリッド形式での開催に重点を置いた。一方、対面のみで開催する親子料理教室や離乳食・幼児食の試食会では、オンラインでは提供できない体験型の情報提供を通じて、食に関する悩みの解消や調理技術の修得を目指した。

標記プロジェクトは4回シリーズで実施し、プロジェクト構成員は代表者以外に大学院博士課程2年生 阿部恵理、修士課程1年生 佐藤ひろ子、鹿野紀美代、伊藤康代、木内苑子、江森佐弥佳、食物学科4年生 山下真菜、3年生 田邊郁乃、芳賀望萌および卒業生でアトリエ mom's 講師 星野薫である。

第1回は8月27日(土)に食の子育て相談会「就学前のお子様がいる方向け」を対面とオンラインのハイブリッド形式にて実施した。会場設営にあたり、お子様連れの参加者に配慮し座りやすい机の配置とお子様とお母さまが参加しやすいように床にラグを敷き座って参加できるように配慮した。また、授乳やおむつ替えができるコーナーも設置した。プログラムは、プロジェクトスタッフによる、子育てがラクになる「食のコミュニケーション」、先輩ママの失敗&成功奮闘記「離乳食のすすめ方」「1歳からのイヤイヤ期対策」「3歳からの好き嫌い対策」の講演と質問&相談会で実施した。

第2回は9月17日(土)に「授乳期からのママと子どもの(愛情♥ごはん)」を対面とオンラインのハイブリッド形式にて実施した。会場設営にあたり、お子様連れの参加者に配慮し座りやすい机の配置とした。離乳食と家族の食事を一緒に作れる方法を調理デモンストレーションし、試食をしてもらった。

第3回はアトリエ mom's 講師(非常勤)の卒業生を招聘し対面により、「離乳食ワークショップ」を実施した。実施にあたりお母さま方に集中して参加いただけるように、外部委託会社に依頼し臨床研究センターを利用し預かり保育を行った。調理台ごとに同じ食材で離乳食前期、後期、幼児食の3種類を調理し試食してもらった。

第4回は1月28日(土)に「親子クッキング講座(親子で楽しいピザ作り)」を開催した。ローテーブルとフロアマットをレンタルし、お子様とお母様が同じ視線で料理ができるように工夫した。最終回のみお父様も参加され親子仲良くピザ作りをしていただいた。参加者の方からは「家でも作ってみたい」と詳細を聞かれたり、「普段は食べ物に興味がないが、今日は食べてくれている」と喜んでいただいた。また、スタッフも非常にやりがいを感じていた。

各回とも参加者から質問なども多く、参加して良かったなどの意見を頂戴し好評であった。



ママと子どもの愛情♥ごはん



ハピ食お疲れ様会



ハピ食スタッフ



離乳食講習会



離乳食講習会食材



親子クッキング講座

# 小学校の読書活動推進への貢献を図る学生ブックソムリエの展開

樺山 敏郎 教授  
(家政学部 児童学科)

## プロジェクトの概要

本プロジェクトは、本学家政学部児童学科児童教育専攻の学生（2年次中心）が千代田区立麴町小学校の読書活動の推進に貢献しようとするものである。

実質的には、読書の秋という時機を捉えて同小学校を訪問し、学生がブックソムリエとなって、児童に対して本の紹介や推薦を行う。

## 1 プロジェクトの目的

児童の読書活動を活性化することは、児童自身の在り方や児童を取り巻くヒト・コト・モノに対する新たな知見を獲得し、これまでの見方や考え方を問い直すとともに、豊かな感性や情操を養うことにつながる。小学校の教員を目指す本学科児童教育の学生が実際に小学校の現場を訪れ、読書のよさや醍醐味を言葉で伝えることにより、その価値や意義を児童と共有する意義は大きい。

## 2 プロジェクトの内容

読書の秋という時機を捉えて千代田区立麴町小学校を訪問し、学生がブックソムリエとなり、児童に対して本の紹介や推薦を行う。ブックソムリエという用語は、一般化されてはいない。代表者が独自にネーミングしたもので、文字通り、本の紹介・推薦する活動である。単に本の粗筋や感想を伝えるだけでなく、相手とやり取りしながら、紹介・推薦する本の世界に巻き込み、相手が“読んでみたい”と思うように誘う活動である。取り上げる本については、小学校国語科教科書の文学的教材（昔話、民話、伝承、物語、ファンタジー、詩など）が書籍化（絵本化）されたもの、併せて国語科教科書の文学的教材と関連して紹介されている教育的価値が高いとされる本や絵本などを取り上げる。

## 3 活動の概要

- 2022年5月26日
  - 本プロジェクトの目的や方法、活動の具体についてのガイダンスの実施
- 2022年6月～10月
  - 関連図書の読書活動の展開
- 2022年9月17日・18日
  - ブックソムリエに係る先進的取組の情報収集（申請代表者）
- 2022年9月29日
  - ブックソムリエの具体的な進め方についてのガイダンスの実施
- 2022年10月20日
  - ブックソムリエに向けての準備
- 2022年11月24日
  - 千代田区立麴町小学校でブックソムリエ活動の実施
- 2023年1月～2月
  - 本プロジェクトのまとめ

#### 4 活動の実際

2022年11月24日 千代田区立麴町小学校（第1、2、3学年）でブックソムリエ活動の実施



#### 5 総括

小学校の教員を目指す本学科児童教育の学生が実際に小学校の現場を訪れ、読書のよさや醍醐味を言葉で伝えることにより、その価値や意義を児童と共有する意義は大きいものがあつた。コロナ禍において児童の学びを保障するという観点から、教科書のみならず本と向き合うことの大切さを実感する機会の提供にもなつた。

## 健康への食意識向上の情報とがんを支える

### 期間限定「がんと健康的な食事・食べ方通信」の定期的配布と取り組み

川口 美喜子 教授  
(家政学部 食物学科)

#### 【本プロジェクトの目的と概要】

日本では2人に1人が一生のうち一度はがんになるというデータがあります。がんは日本人にとって身近な病気で、その予防は多くの人々の関心を集めるテーマです。また、地域、職員の方とその家族や知人ががんの闘病中の方もいます。がん予防は、がんと生活習慣病・環境との間に深い関わりがみられ生活習慣を改善することで誰でもがん予防に取り組むことができます。学生や学内職員、地域の方々楽しく、無理なく、健康的な食習慣の維持を大切にしよう、より健康的な生活習慣を取り入れてみようと動き出すこと。そして、健康的な食習慣やがんの食事について悩んでいる事、疑問に思うこと、戸惑うことを気軽に相談し、心身を整える助けになる時間を作ることを目的としたイベントを企画しました。

#### 【活動スケジュール】

『食べて 動いて 整える』そして、「自分に恋して」をスローガンに活動を行いました。

#### 【内容】

第1回 10月6日(木) 17:30～18:30 終業後のヨガ教室「お疲れさまのヨガ」の開催

18:00～ 黄色とみどり色のスムージーの提供／アンケートの実施

第2回 11月1日(火) 7:30～8:15 始業前のヨガ教室「モーニングヨガ」の開催

8:10～ 黄色と紫色のスムージー提供／アンケートの実施

健康的なサプリメント取り方の情報と提供

第3回 12月5日(月) 17:30～18:30 終業後のヨガ教室「お疲れさまのヨガ」の開催と

がんのお悩み相談室

18:00～ 体に優しいスープ・キノコと栗のポタージュの提供／アンケートの実施

スムージーのレシピ集 配布

第4回 1月16日(月) 17:30～18:30 終業後のヨガ教室「お疲れヨガ」の開催お悩み相談室

18:00～ 体に優しいスープ・花にんじんと生麩のスープ、カボチャのポタージュの提供

「時短、簡単、心うれしい」料理メニューの配布

「がんと健康的な食事・食べ方通信」の配布

第5回 2月15日(水) 17:30～18:30 終業後のヨガ教室「お疲れヨガ」の開催とがんのお悩み相談室

18:00～ 赤のスムージー、大葉と梅のやきおにぎりと鮭のおにぎりの提供

毎回開催したヨガ講師によるヨガ教室は、自身の体と向き合い、終業前や終業後の体と心を整える時間とした。スムージー、スープ、ポタージュの提供は、お悩みに沿った栄養改善を目指し、簡単に調理ができ、日頃不足しているフルーツや野菜を簡単に美味しく食べられことを知って頂くよう提供を行った。季節の旬の食材を多く取り入れ、きれいで美味しい食を意識して頂きたいと工夫をした。

お悩み相談室にはがんケアのアドバイスができる看護師、管理栄養士を招き、軽食を片手に健康や食

に関する悩み事を気軽に話せる空間を作り、それぞれのお悩みに沿ったアドバイスを行った。



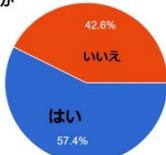
### 【まとめ】

全5回のプロジェクトを通じ、地域の方々や学生、職員の健康意識の向上や、関心を持ち続けることへの支援と「がん」についての悩みの相談場所の提供ができた。

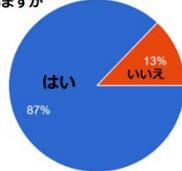
今後も継続し、正しい食の知識の提供とがんについて戸惑っている方の相談の場をつくる活動を行っていきたい。

#### アンケート結果から（回答 54 名）

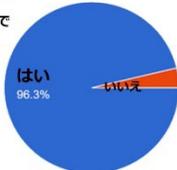
イベントに参加して、ヨガに興味を持ちましたか



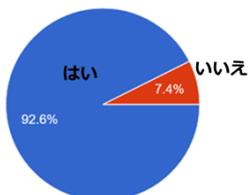
日々の生活の中に運動を取り入れてみようと思いますか



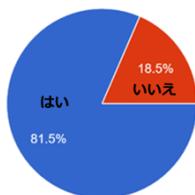
イベントに参加して、スムージーやスープで野菜摂取を増やしてみようと思いましたか



がんの栄養について関心がありますか



学内でがんについての話題提供を期待しますか



# 大妻さくらフェスティバル 2023

日時：令和5年3月18日(土) 10:00～16:00

メイン会場：千代田キャンパス本館 E 棟・F 棟

特別企画会場：博物館、図書館

来場者数：815 名

## パンフレット表紙デザイン画

応募期間：令和4年11月1日(火)～令和5年1月6日(金) 17:00

応募資格：小・中・高・大学生

応募総数：22 点

賞：上位 5 点を入選作品とする。

1 位：表紙 1 面に掲載（賞状、図書カード 5 千円）

2～5 位(4 点)：裏表紙 1/4 面に掲載（賞状、図書カード 3 千円）

入選作品発表

①パンフレット

②パネル展示：E 棟 3F エスカレーターホール

## 俳句大賞

応募期間：令和4年11月1日(火)～令和5年1月6日(金) 17:00

応募部門：小学生以下の部、中学・高校生の部、一般の部

応募テーマ：月、実

応募総数：367 名 1,001 句（月 558 句 実 377 句）

※部門ごとの( )内の句数は、審査対象外の句を除いています。

賞：理事長・学長賞 全テーマ、全部門から 6 名(賞状、図書カード 5 千円)、

優秀賞 各テーマ、各部門から 3 名(計 18 名)(賞状、図書カード 3 千円)

受賞作品発表

①パンフレット

②パネル展示：E 棟 3F エスカレーターホール

## 講演会「大妻コタカの教え」

挨拶：樋口高頭氏（千代田区長）、伊藤正直氏（理事長・学長）

講演会講師 井上小百合氏（大妻コタカ記念会会長）

会場：本館 B1F E055 室

## 公開講座「女性がはたらき、成長するということ」

挨拶：伊藤正直氏（理事長・学長）

公開講座講師 村木厚子氏（学校法人大妻学院理事・大妻女子大学共生社会文化研究所顧問）

終了挨拶：小川浩氏（大妻さくらフェスティバル実行委員長・地域連携推進センター所長）

会場：本館 B1F E055 室

### イベント「春休み小学生講座」

小学生を対象に次のとおり開催。

#### 「理科実験教室」

- ・化石掘り体験～火山灰調べ

#### 「工作教室」

- ・とにかくつくってみよう
- ・新聞エコバッグをつくってみよう

#### 「体験教室」

- ・間伐材を使って工作をしよう
- ・ハーバリウムをつくろう！
- ・桜模様のセッケンカービングをつくろう！
- ・キャンディ型のおい袋をつくろう！
- ・カレー粉をつくろう！

### イベント「小学生でも理解できる航空教室」

日本航空のオペレーションスタッフが「飛行機はどうして飛ぶの？」というテーマで小学生に理解できるように説明。

協力：株式会社 JAL スカイ

※株式会社 JAL スカイは大妻女子大学の協定締結団体です。

### 課外活動団体のイベント

- ・バルーンアート同好会「ばろん。」  
会場のバルーン装飾
- ・おーたんフレンズ  
大学公認キャラクター“おーたん”との記念撮影会
- ・パネルシアター部  
公演
- ・Hand Made サークル「belle époque」  
アクセサリー販売

### パネル展示

- ①千代田学ポスター展示：千代田区内の大学が千代田区に関するさまざまな事象を調査・研究「千代田学」のポスター発表
- ②俳句大賞発表：受賞作品をパネル展示
- ③パンフレット表紙デザイン画入選作品発表：入選作品をパネル展示

会場：E棟 3F エスカレーターホール

## 学生食堂を体験

大妻コタカ先生の出身地である広島県世羅郡世羅町の「世羅梨」を使ったコンポートを、定食メニューのデザートとして提供（数量限定）

地域の町会役員、俳句大賞入賞者、表紙絵入賞者を招待

## 「おおつま ほいっぷ あんぱん」の販売

大妻女子大学の校章をイメージした焼き印をあしらった「おおつま ほいっぷ あんぱん」を販売

会場：E棟 3F エスカレーターホール（午前）、：E棟 1F エントランスホール（午後）

## 北海道美瑛町の魅力発信コーナー

北海道美瑛町の食材を使ったコロケやスイーツなどを販売

会場：F棟 コミュニティテラス

協力：北海道美瑛町

※北海道美瑛町は、大妻女子大学の協定締結団体です。

## 特別企画（大妻女子大学博物館）

①コタカ先生のお宅訪問！

創立者の住まいに関わる資料、移築復元した居室、生家の模型の展示

②パネル展「ちょっと昔の大妻界限」

昭和から平成に撮影された、千代田キャンパス付近の写真展示

## 特別企画（大妻女子大学図書館）

マンガ「教えの道をひとすじに 大妻コタカ物語」の原画展示

## 特別企画（大妻コタカ記念会、大妻女子大学大妻コタカ・大妻良馬研究所）

大妻コタカ先生の残した言葉と写真を会場各所に「大妻コタカ先生からの言葉をあなたへ」と題して10の言葉を展示

# 業務報告

## 事業内容

### 1. 地域連携プロジェクト

大妻女子大学では、教職員・学生によって様々な地域連携活動が行われています。教職員のグループ又は教職員と学生のグループによる、学生の主体性や自立心が身に付く地域連携活動の一層の推進・発展を図ることを目的に、その活動経費を補助する「地域連携プロジェクト」が平成25年度から始まりました。

令和4年度は18件の申請中18件が採択されました。

申請受付	令和4年5月12日(木)～令和4年6月7日(火) 正午
結果通知	令和4年6月13日(月)
授与式、事務説明会	令和4年6月18日(土)
プロジェクト支援	令和4年5月12日(木)～令和5年3月31日(金)
活動報告	「大妻さくらフェスティバル2023」パンフレットへの活動報告掲載 大学ウェブサイトへの活動報告動画掲載

### 2. 地域貢献プロジェクト

大妻女子大学では、様々な地域貢献活動が行われています。広く地域のみなさまへ本学の教育と研究成果を還元し、みなさまの多様な学習ニーズに応えるとともに、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動の推進を図ることを目的に、その活動経費を補助する「地域貢献プロジェクト」が平成26年度から始まりました。

令和4年度は3件の申請中3件が採択されました。

申請受付	令和4年5月12日(木)～令和4年6月7日(火) 正午
結果通知	令和4年6月13日(月)
授与式、事務説明会	令和4年6月18日(土)
プロジェクト支援	令和4年5月12日(木)～令和5年3月31日(金)
活動報告	「大妻さくらフェスティバル2023」パンフレットへの活動報告掲載 大学ウェブサイトへの活動報告動画掲載

### 3. 地域連携推進センター自主企画等

- (1) パイプオルガンコンサート（ウクライナ人道支援チャリティーコンサートとして実施）

令和4年6月4日(土) 18:00～20:15

参加者：約400名

- (2) 大妻みちあそび

令和4年7月16日(土) 10:00～12:00、13:00～15:00

参加者約140名

- (3) 夏休み小学生講座 「理科実験教室」「工作・体験教室」

令和4年8月10日(水) 10:00～15:00

参加者63名

(4) 地域の方との懇談会

令和5年3月18日(土) 「大妻さくらフェスティバル2023」の一環として実施

#### 4. 会議

(1) 地域連携推進センター運営委員会

第1回 令和4年5月11日(水)(文書協議)

第2回 令和4年6月25日(土)(文書協議)

第3回 令和4年12月6日(火)(文書協議)

(2) 地域連携推進センター企画実行委員会

第1回 令和4年4月27日(水)(文書協議)

第2回 令和4年9月30日(金)(文書協議)

(3) 大妻さくらフェスティバル2023実行委員会

第1回 令和4年10月17日(月)(文書協議)

#### 5. 地域との連携活動等

(1) 春のアダプト事業(千代田キャンパス近隣花植活動)

活動日: 令和4年6月23日(木)

活動内容: 地域住民、本学学生、大妻中学高等学校の生徒、九段小学校の児童、九段幼稚園の園児と一緒に、大学周辺の歩道内及び近隣の公園の植樹枡へ花植えを実施。

(2) 秋のアダプト事業(千代田キャンパス近隣花植活動)

活動日: 令和4年11月24日(木)

活動内容: 地域住民、本学学生、大妻中学高等学校の生徒、九段小学校の児童、九段幼稚園の園児と一緒に、大学周辺の歩道内及び近隣の公園の植樹枡へ花植えを実施。

(3) お祭り参加

① みたままつり神輿振り

令和4年7月 ※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため参加見合わせ

#### 6. 千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム(以下「千代田区キャンパスコンソ」)

(1) 千代田区キャンパスコンソ運営委員会

令和4年4月22日(金)、5月27日(金)、6月24日(金)、7月29日(金)、9月30日(金)、10月28日(金)、12月2日(金)、令和5年1月20日(金)、2月21日(火)、3月17日(金)の計10回開催

(2) 人事交流会

令和4年8月5日(金)及び8月22日(月)の計2回実施(於:法政大学)

(3) 千代田区キャンパスコンソ5大学企画委員会 ※各大学の副学長又はそれに準じる者が出席

令和4年9月6日(火)10:00~11:30実施(於:法政大学)

(4) 千代田区キャンパスコンソ共同公開リレー講座

テーマ:ちよだで学ぶ2022ーモノ・コト・ヒト/現在・過去・未来ー

本学からは以下の2名の教員が担当。

令和4年9月9日(金)~10月31日(月) 樺山敏郎教授(家政学部 児童学科)

『書く心』へのアプローチ～なぜ、人は書くのか?～」オンデマンド（動画配信）  
令和4年9月9日(金)～10月31日(月) 田口裕基専任講師(短期大学部 家政科 食物栄養専攻)  
「カレーのカガク」オンデマンド（動画配信）

(5) キャリア形成支援講座

テーマ：未来予測が困難な時代のキャリア形成を考える

本学からは以下の2名の教員が担当。

令和4年9月26日(月)～10月12日(水) 井上俊也教授（キャリア教育センター）

「ポストデフレの働き方と学び方」オンデマンド（動画配信）

令和4年9月26日(月)～10月12日(水) 澤田裕美常勤特任講師（キャリア教育センター）

「ポストコロナの女性の働き方と学び方」オンデマンド（動画配信）

(6) 千代田学共同提案事業（計3年間での事業計画における2年目）

本学からは下坂智恵教授（短期大学部）及び堀洋元准教授（人間関係学部）の2名の教員が共同研究者となり、「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」を行った。また、令和4年12月17日(土)及び令和5年2月22日(水)に学生を対象とした「帰宅困難者支援施設運営ゲーム」を実施した。

(7) 千代田区長と学長等との懇談会

令和5年1月20日(金) 11:30～12:05（於：KKR ホテル東京）

小川浩地域連携推進センター所長が出席。

(8) 令和4年度私立大学等改革総合支援事業

「タイプ3 地域社会の発展への貢献（プラットフォーム型）」に申請。大学・短期大学部ともに選定。

（実績：平成30年度より毎年選定）

## 7. その他

(1) 連携協定

令和4年5月25日(水)付で、地域社会の発展、教育の振興及び人材育成などに寄与することを目的に、北海道美瑛町と包括連携協定を締結した。

(2) 全学共通科目

協定を締結している企業・団体の協力のもと実施。

「地域文化理解Ⅰ」

令和4年9月5日(月)～9月9日(金) JAL スカイ、東京ステーションホテル、文化放送

「地域文化理解Ⅱ」

令和5年2月6日(月)～2月10日(金) ソシエテミックニ、国際食文化交流協会

(3) 千代田区内大学と千代田区の連携協力会議総会

令和5年1月20日(金) 9:30～11:30（於：KKR ホテル東京）

小川浩地域連携推進センター所長が出席。

(4) 大妻タイムズ

令和4年9月29日(木) No.10 発行

令和5年3月30日(木) No.11 発行

## 令和4年度 決算報告

単位：円

費 目	当初予算額	1回目 組替予算額 (令和4年6月28日 付承認)	①2回目 組替予算額 (令和4年12月12日 付承認)	②決算額	①－②収支差額
プロジェクト費	<b>4,000,000</b>	<b>4,700,000</b>	<b>4,000,000</b>	<b>3,528,972</b>	<b>471,028</b>
地域連携プロジェクト	3,000,000	3,800,000	3,000,000	2,732,129	267,871
地域貢献プロジェクト	1,000,000	900,000	1,000,000	796,843	203,157
連携・協定関係費	<b>1,315,000</b>	<b>1,315,000</b>	<b>915,000</b>	<b>623,409</b>	<b>291,591</b>
事業運営費	<b>3,800,000</b>	<b>3,100,000</b>	<b>4,000,000</b>	<b>2,380,366</b>	<b>1,619,634</b>
大妻さくらフェスティバル	1,700,000	1,700,000	2,520,000	1,927,522	592,478
センター自主企画等	1,300,000	600,000	1,050,000	330,570	719,430
公開講座等	800,000	800,000	430,000	122,274	307,726
センター事務経費	<b>800,000</b>	<b>800,000</b>	<b>1,000,000</b>	<b>756,999</b>	<b>243,001</b>
千代田キャンパス	500,000	500,000	700,000	622,746	77,254
多摩キャンパス	300,000	300,000	300,000	134,253	165,747
合 計	<b>9,915,000</b>	<b>9,915,000</b>	<b>9,915,000</b>	<b>7289,746</b>	<b>2,625,254</b>

## 大妻女子大学地域連携推進センター規程

平成 25 年 3 月 27 日  
制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、本学における地域連携・社会貢献等(以下「地域連携」という。)推進の中核的組織としての機能を果たすことを目的とし、大妻女子大学学則(昭和 48 年 4 月 1 日制定)第 39 条第 3 項及び大妻女子大学短期大学部学則(昭和 49 年 4 月 1 日制定)第 39 条第 2 項の規定に基づき、大妻女子大学地域連携推進センター(以下「センター」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(業務)

第 2 条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 産学官連携に関する業務
  - ・ 地域連携にかかる活動や事業の情報発信に関する業務
  - ・ 地域連携のためのプロジェクト事業等に関する業務
  - ・ 社会(市民、企業、行政等)のニーズと大学の持つ機能のマッチング支援に関する業務
- (2) 卒業生及び同窓会との連携に関する業務
- (3) 中学・高校・大学との連携に関する業務
- (4) 公開講座に関する業務
- (5) 地域連携推進センターの分掌に係る会議に関する業務
- (6) 前各号に掲げる業務の他、地域連携に関する業務

2 前項の業務を行うための事務は、センターが行う。

(組織)

第 3 条 センターに次の教職員を置く。

- (1) センター所長
- (2) センター事務部長
- (3) センター事務課長
- (4) センター事務職員 若干名

2 センター業務に関して、その共同推進、学内の横断的連携推進等を図るために、必要に応じて、併任教員を置くことができる。

3 センター併任教員は、学長が委嘱する。任期は 2 年とし、再任を妨げない。

4 センター所長は、本学専任教員の中から学長が任命する。任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。

5 センター所長は、センターの業務を掌理する。また、所長に事故あるときは、所長があらかじめ指名した者がその職務を代行する。

(運営委員会及び企画実行委員会)

第 4 条 センターに、センターの運営その他の重要事項を審議するため、センター運営委員会を置く。

2 第2条に掲げる業務の企画実行を行うため、センター運営委員会の下にセンター企画実行委員会を置く。

3 センター運営委員会及びセンター企画実行委員会の規程は、別に定める。

(運営細則)

第5条 この規程に定めるもののほか、センターの管理・運営について必要な事項は、運営細則として別に定める。

(規程の改廃)

第6条 この規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て、大学運営会議において定める。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成25年6月25日から施行し、平成25年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成27年5月26日から施行し、平成27年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成29年6月6日から施行し、平成28年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成30年9月7日から施行し、平成30年4月1日から適用する。

## 大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会規程

平成 25 年 3 月 27 日

制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大妻女子大学地域連携推進センター規程(平成 25 年 3 月 27 日制定)第 4 条第 1 項の規定に基づき設置される、大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(所掌事項)

第 2 条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 大妻女子大学地域連携推進センター(以下「センター」という。)の運営の方針等に関する事項
- (2) センター規程及びセンター運営委員会規程等の改廃に関する事項
- (3) センターの運営に関する予算及び決算等に関する事項
- (4) その他センターの運営に関する必要な事項

(組織)

第 3 条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター所長
  - (2) センター事務部長
  - (3) センター事務課長
  - (4) 家政学部長、文学部長、社会情報学部長、人間関係学部長、比較文化学部長及び短期大学部長
  - (5) 人間文化研究科長
  - (6) 事務局長
  - (7) その他学長の委嘱する者 若干名
- 2 前項第 7 号の委員の任期は、1 年とする。ただし、再任を妨げない。
- 3 学長、副学長及び事務局各部長は運営委員会に出席し、意見を述べることができる。

(委員長)

第 4 条 運営委員会に委員長を置き、所長をもってこれに充てる。

- 2 委員長は運営委員会を代表し、その職務を掌理する。
- 3 委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した者がその職務を代行する。

(会議)

第 5 条 委員長は、原則として運営委員会を年 2 回招集し、その議長となる。

- 2 運営委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。
- 3 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 4 運営委員会は、委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴取することができる。
- 5 運営委員会は、委員長が必要と認めるときは、臨時に開催することができる。
- 6 運営委員会は、委員長が認めるときは、文書協議をもってそれに代えることができる。

(庶務)

第 6 条 運営委員会の庶務は、センターが行う。

(補足)

第7条 この規程に定めるもののほか、運営委員会の運営に関して必要な事項は、運営委員会において定める。

(規程の改廃)

第8条 この規程の改廃は、運営委員会において定める。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

## 大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会規程

平成 25 年 3 月 27 日  
制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大妻女子大学地域連携推進センター規程(平成 25 年 3 月 27 日制定)第 4 条第 2 項の規定に基づき設置される、大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会(以下「企画実行委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(所掌事項)

第 2 条 企画実行委員会は、大妻女子大学地域連携推進センター(以下「センター」という。)の運営方針に基づき、次の各号に掲げる事項について審議する。

(1) 産学官連携に関する事項

- ・ 地域連携にかかる活動や事業の情報発信に関する事項
- ・ 地域連携のためのプロジェクト事業等の企画・実行に関する事項
- ・ 社会(市民、企業、行政等)のニーズと大学の持つ機能のマッチング支援に関する事項

(2) 卒業生及び同窓会との連携に関する事項

(3) 中学・高校・大学との連携に関する事項

(4) 公開講座に関する事項

(5) 地域連携推進センターの分掌に係る会議に関する事項

(6) 企画実行委員会規程等の改廃に関する事項

(7) その他センターの企画・実行に関し必要な事項

(組織)

第 3 条 企画実行委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1) センター所長

(2) センター事務部長

(3) センター事務課長

(4) センター事務職員から 1 名

(5) センター併任教員

(6) 家政学部、文学部、社会情報学部、人間関係学部、比較文化学部、短期大学部及び人間文化研究科から選ばれた専任教員(各学部 1 名、人間文化研究科 1 名)

(7) 学長の委嘱する専任教員 若干名

(8) その他事務局長の委嘱する者 若干名

2 前項第 6 号、第 7 号及び第 8 号の委員の任期は、1 年とする。ただし、再任を妨げない。

3 前項第 6 号及び第 8 号の委員は、併任教員が兼務することができる。

(委員長)

第 4 条 企画実行委員会に委員長を置き、所長をもってこれに充てる。

2 委員長は企画実行委員会を代表し、その職務を掌理する。

3 委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(会議)

第 5 条 委員長は、必要に応じて委員会を招集し、その議長となる。

2 企画実行委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

- 3 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 4 企画実行委員会は、委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴取することができる。
- 5 企画実行委員会で企画した事業等は、必要に応じ、大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の承認を得るものとする。

（庶務）

第6条 企画実行委員会の庶務は、センターが行う。

（補足）

第7条 この規程に定めるもののほか、企画実行委員会の運営に関して必要な事項は、企画実行委員会において定める。

（規程の改廃）

第8条 この規程の改廃は、企画実行委員会の議を経て、運営委員会において定める。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年5月26日から施行し、平成27年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成29年6月6日から施行し、平成28年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

大妻女子大学 地域連携推進センター  
令和4年度年報 第10号

令和5年7月発行

大妻女子大学 地域連携推進センター  
〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地  
TEL (03)5275-6877  
URL <https://www.otsuma.ac.jp/society/>  
E-mail [chiiki@ml.otsuma.ac.jp](mailto:chiiki@ml.otsuma.ac.jp)

